

學中  
日本文典  
上級用

3759  
Y619  
資料室

41873

教科書文庫

4
815
41-1934
20000 34995

Kodak Gray Scale



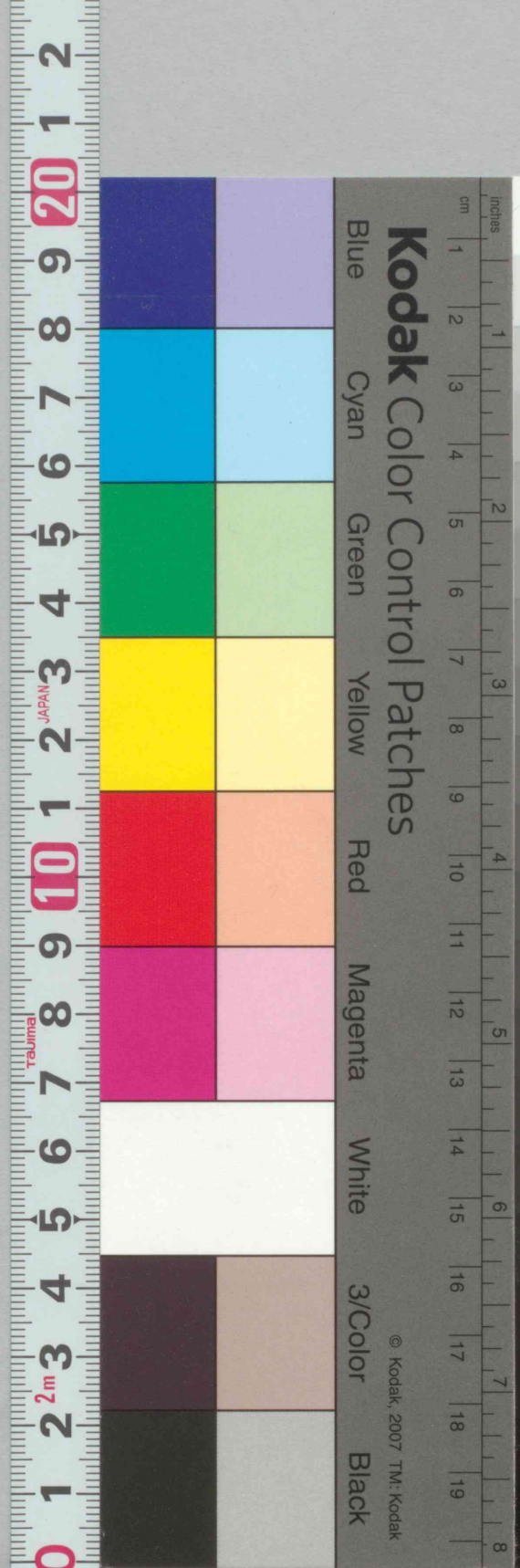
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

3959

Y019

文部省檢定濟

昭和九年二月十三日 中國語文教科用

吉田彌平著

修正再版

中國語文典 上級用

東京 光風館藏版



### 緒言

- 一 本書は現行の中學校教授要目に基づき、中學校上級生徒に課すべき文法の教科書として編纂したものである。
- 一 本書は前篇に於て第一學年に習得した品詞に關する知識を整理復習せしめ、後篇に於て更に之を補説し、進んで文章に關する知識を與へる仕組にした。
- 一 まづ平易な實例によつてその中に含まれてゐる國語の法則を歸納的に指示し、更に練習問題によつて之を演繹的に應用せしめる方針を採つた。
- 一 成るべく文語を本にして口語を對照し、文語法を習得すると共に、一通りの口語法に通ぜしめるやうにと努めた。

一本書は用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、數種の中學校用國語讀本、並に各高等專門學校入學試驗問題等の中から、最も實用に適切なものを採録した。

昭和八年九月

著者識す

# 中學日本文典上級用

## 目次

### 前篇

第一章	總說	……………	一頁
第二章	品詞	……………	二
	名詞	代名詞 動詞 形容詞 助動詞	
	副詞	接續詞 感動詞 助詞	
第三章	名詞の種類	……………	五
	固有名詞	普通名詞 數詞	
第四章	代名詞の種類	……………	六
	人代名詞	物代名詞	

第五章 動詞の活用及び活用形……………八

    四段活用……………ら行變格活用……………な行變格活用

    上二段活用……………下二段活用……………上一段活用

    下一段活用……………か行變格活用……………さ行變格活用

第六章 口語動詞の活用及び活用形……………二三

    口語四段活用……………口語上一段活用……………口語下一段活用

    口語か行變格活用……………口語さ行變格活用……………

第七章 動詞の自他……………二五

    自動詞……………他動詞……………

第八章 動詞の音便……………二八

    い音便……………う音便……………撥音便……………促音便……………

第九章 形容詞の活用及び活用形……………三〇

    第一類活用……………第二類活用……………

第十章 形容詞と動詞との結合附形容詞の音便……………三三

形容詞の連用形と動詞ありとの結合……………

形容詞の連用形と動詞すとの結合……………

う音便……………い音便……………

第十一章 助動詞の種類活用及び活用形……………三五

    時の助動詞……………打消の助動詞……………推量の助動詞……………

    受身の助動詞……………可能の助動詞……………使役の助動詞……………

    尊敬の助動詞……………指定の助動詞……………詠歎の助動詞……………

    希望の助動詞……………比説の助動詞……………

第十二章 口語助動詞の種類活用及び活用形……………三〇

    時の助動詞……………打消の助動詞……………推量の助動詞……………

    受身の助動詞……………可能の助動詞……………使役の助動詞……………

    尊敬の助動詞……………對話の助動詞……………指定の助動詞……………

    希望の助動詞……………

第十三章 副詞の用法……………三三

第十四章 接續詞の種類……………三四

累加の接續詞 選擇の接續詞 原因理由の接續詞  
反意の接續詞

第十五章 感動詞の種類及び用法……………三七

文の首につくもの 文の末につくもの

第十六章 助詞の種類及び用法……………三七

體言に添はる助詞 種々の語に係はる助詞

用言に添はる助詞

### 後篇

第一章 品詞の轉成……………四三

轉來の名詞 轉來の代名詞 轉來の副詞

轉來の接續詞

第二章 語の構成その一……………四六

疊語 熟語

第三章 語の構成その二……………五四

接頭語 接尾語

第四章 動詞と助動詞との接續その一……………四六

動詞の未然形に續く助動詞

第五章 動詞と助動詞との接續その二……………四七

動詞の連用形に續く助動詞

第六章 動詞と助動詞との接續その三……………四七

動詞の終止形に續く助動詞

第七章 動詞と助動詞との接續その四……………七六

動詞の連體形に續く助動詞

動詞の已然形に續く助動詞

第八章 助動詞相互の接續……………八一

完了助動詞と過去助動詞との重用

完了助動詞と未來助動詞との重用

第九章 用言と助詞との接續その一……………八六

ばとともども 七

第十章 用言と助詞との接續その二 七

に を が つながら

のみ ばかりまで な なそ

第十一章 用言と助詞との接續その三 一〇五

並別のと 指定のと

第十二章 用言と助詞との接續その四 一〇九

や か

第十三章 誤り易い品詞 一二三

なの識別 なむの識別 への識別

しの識別 つの識別 ばやの識別

はがをもやかの識別

第十四章 品詞の解剖 一二三

第十五章 文の成分 一二五

目次

主語 述語 客語 補語 修飾語

第十六章 文の成分の排列及び省略 一三三

常の位置 成分の倒置 成分の省略

第十七章 節 一四〇

名詞節 形容節 副詞節 述語節 對立節

第十八章 文の構造上の分類 一四五

單文 複文 重文

第十九章 文の性質上の分類 一五三

敘述文 疑問文 命令文 感歎文

第二十章 文のとめ附係結 一五七

終止形でとめるもの

連體形で結ぶもの

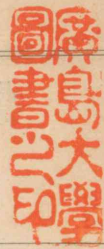
已然形で結ぶもの

命令形でとめるもの

助詞又は感動詞でとめるもの

目次終

中學日本文典 上級用



前篇

第一章 總說

聲音によつて思想をあらはしたものを語又は言語といひ、文字  
 を用ひて言語をうつしたものを文又は文章といふ。  
 世界の國々にはそれ／＼の言語がある。これをその國の國語  
 といふ。日本語は即ち我が日本の國語である。  
 我が國語は昔は一すぢであつたが、時代のたつにつれて、談話に  
 用ひるものと文章に用ひるものと二すぢに分れた。談話に

言語 文章 國語



口語

文法

用ひるものはこれを口語といひ、文章に用ひるものはこれを文語といふ。口語及び文語にはそれ々の法則がある。これを文法といふ。時としては、口語の法則を口語法といひ、文語の法則を文語法といふことがある。文法を學ぶことは、他人の思想を正しく理解する爲にも、わが思想を正しくあらはす爲にも、共に必要である。

第二章 品詞

品詞

我が國語を組立ててゐる單語は、その性質やはたらきによつて九つの種類に分ける。これを品詞といふ。今左に之を略説しよう。

名詞

事物の名をあらはす

一名

詞

梅 鶯 竹 虎  
學問 スポーツ  
日本 豊臣太閤  
佛蘭西 ナポレオン

代名詞

人又は事物の場所・方向を指す

二代名詞

我 汝 彼 誰 (人を指す)  
これ それ かれ いづれ (事物をさす)  
こゝ そこ かしこ いづこ (場所をさす)  
あなた そなた あなた いづかた (方向をさす)

動詞

事物の動作又は存在をあらはす

三動

詞

讀む 有り 死ぬ  
消ゆ 朽つ 見る  
蹴る 來 爲

形容詞 事物の性質や有様をあらはす

助動詞 おもに動詞に添うてその意味を助ける

副詞 動詞形容詞又は他の副詞の意味を限定する

接続詞 語句のつなぎに用ひる

感動詞 物に感動した時にいふ

助詞 語句に添うてその語句との關係をあらはす

四 形容詞	白し 美し	重し 同じ
五 助動詞	む べし	ぬ り
六 副詞	必ず 大いに	頗る
七 接続詞	且 又	及 び
八 感動詞	あゝ や	或 は
九 助詞	は の	か な
		ど も

名詞の種類

第三章 名詞の種類

名詞には左の二種ある。

固有名詞

一 固有名詞は特に一つの事物につけた名である。

普通名詞

二 普通名詞は同じ種類の事物に通ずる名である。

數詞

三 この外、數に關する名詞を特に數詞ともいふ。

イ 廣く數量をあらはすもの。

- 一 一
- 二 二
- 三 三
- 四 四
- 五 五
- 六 六

ロ 特殊の物の數量をあらはすもの。

- 一人
- 二羽
- 三本
- 四枚
- 五尺
- 六メートル
- 七升

八リットル 九グラム 拾錢 百圓

ハ 順序をあらはすもの。

第一 二番 三つめ 第四番 第五號 六番め

代名詞の種類

第四章 代名詞の種類

代名詞は、通常これを人代名詞と物代名詞とに分ける。

人代名詞  
人を指す  
物代名詞  
事物・場所・  
方向を指す

人代名詞は、その指される人の自分なるか、相手なるか、第三者なるか、又は誰とも定まらぬかによつて、これを自稱對稱他稱不定稱の四つに分ける。  
物代名詞は、指される事物・場所・方向の遠・近・定・不定等によつてこれを近稱・中稱・遠稱・不定稱の四つに分ける。  
左の表を見よ。

自稱 話す人自ら指す  
對稱 相手を指す  
他稱 自分及び相手の外の人即ち第三者を指す  
不定稱 それと定めぬ人又はわからぬ人を指す  
近稱 近くにある事物・場所・方向を指す  
中稱 や、離れてゐる事物・場所・方向を指す  
遠稱 離れてゐる事物・場所・方向を指す  
不定稱 それと定めぬ又は分らぬ事物・場所・方向を指す

代名詞		人代名詞				物代名詞					
		自稱	對稱	他稱	不定稱	場所	事物	近稱	中稱	遠稱	不定稱
		余	汝	彼	誰	場所	事物	近稱	中稱	遠稱	不定稱
		わ	な	か	た	いづこ	か	こ	そこ	あそこ	いづこ
		われ	君	あれ	だれ(口)	なし	かれ	これ	そこ	かしこ	どこ(口)
		おのれ	あなた(口)	あの人(口)	どなた(口)		あ	これ	そこ		
		私	おまへ(口)				あれ				
		僕									

動詞の活用

第五章 動詞の活用及び活用形

動詞は、その下部がいろ／＼に變化する。例へば 咲く といふ動詞が、

咲<sup>か</sup>  
け<sup>か</sup> く<sup>き</sup> き<sup>き</sup> か<sup>か</sup>

		方向			
		不定稱	遠稱	中稱	近稱
	いづかた	いづち	あなた	そなた	こなた
	いづち	いづち	あなた	そち	こち
	どちら(口)	どちち(口)	あちら(口)	そちら(口)	こちら(口)
	どつち(口)	どつち(口)	あつち(口)	そつち(口)	こつち(口)

語幹

語尾

活用

動詞の活用形

未然形  
連用形  
終止形  
連體形  
已然形  
命令形

四段活用  
五十音圖中の  
あ、い、う、え、  
段に活用する  
もの

と變化する類である。而して變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。動詞の活用には四段、ら行變格、な行變格、上二段、下二段、上一段、下一段、か行變格、さ行變格の九つの種類がある。これら各活用の各語形は、その用法によつて、未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六つに分ける。之を動詞の活用形といふ。左の表を見よ。

活用  
語幹 語尾

一四段 咲<sup>か</sup>  
け<sup>か</sup> く<sup>き</sup> き<sup>き</sup> か<sup>か</sup>

咲<sup>か</sup>  
け<sup>か</sup> く<sup>き</sup> き<sup>き</sup> か<sup>か</sup>

あ段(未然形)……花咲かす。  
い段(連用形)……花咲き亂る。  
う段(終止形)……花咲く。  
え段(連體形)……花咲く春は樂し。  
え段(已然形)……花咲けば、見にゆく。  
え段(命令形)……花よ咲け。

ら行變格活用  
 行四段に活用する動詞のうち有り・居り・待りの三語  
 な行變格活用  
 五十音圖中な行のあ・い・う・え・四段に活用し且そのう段の音にるれ<sub>1</sub>の添はるもの即ち死ぬ・往ぬの二語  
 上二段活用  
 五十音圖中い・うの二段に活用し且そのう段の音にるれ<sub>1</sub>の添はるもの

二 ら行變格 有<sub>あ</sub>  
 語幹 語尾  
 ろ れ る り り ら

形  
 あ段(未然形)……功有らば賞せられん。  
 い段(連用形)……功有りて賞せらる。  
 (終止形)……旅順の役に功有り。  
 う段(連體形)……功有る者は賞せらる。  
 え段(已然形)……功有れども賞せられず。  
 (命令形)……父祖に劣らぬ戦功有れ。

三 な行變格 死<sub>し</sub>  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

形  
 あ段(未然形)……われ將に王事に死なんとす。  
 い段(連用形)……一門悉く王事に死に果てぬ。  
 (終止形)……潔く王事に死ぬ。  
 う段(連體形)……王事に死ぬる將卒多し。  
 え段(已然形)……死ぬれども悔いず。  
 (命令形)……潔く王事に死ぬ。

四 上二段 起<sub>き</sub>  
 こ け け け け け  
 こ け け け け け  
 こ け け け け け  
 こ け け け け け

形  
 きよれ。る。る。る。る。る。  
 い段(未然形)……未だ起きず。  
 (連用形)……早く起き遅く寝ぬ。  
 (終止形)……早く起く。  
 う段(連體形)……遅く起くることなかれ。  
 (已然形)……早く起くれば心地よし。  
 (命令形)……早く起きよ。

下二段活用  
 五十音圖中え<sub>1</sub>の二段に活用し且そのう段の音にるれ<sub>1</sub>の添はるもの

五 下二段 受<sub>う</sub>  
 け け け け け け  
 け け け け け け  
 け け け け け け  
 け け け け け け

形  
 え段(未然形)……恩を受けば、必ず報いよ。  
 (連用形)……恩を受けたり。  
 (終止形)……恩を受く。  
 う段(連體形)……恩を受くること久し。  
 (已然形)……恩を受くれば、必ず報ゆ。  
 (命令形)……願はくは余の寸志を受けよ。

上一段活用  
 五十音圖中い<sub>1</sub>の一段にのみ活用し且これにるれ<sub>1</sub>の添はるもの

六 上一段 見<sub>み</sub>  
 み み み み み み  
 み み み み み み  
 み み み み み み  
 み み み み み み

形  
 (未然形)……花をみず。  
 (連用形)……花をみいだせり。  
 (終止形)……花をみる。  
 (連體形)……花をみる人あり。  
 (已然形)……花をみれば、心慰む。  
 (命令形)……花をみよ。

試みるはま行の上二段にも活用し用ゐるはは行の上二段にも活用する

上一段に活用するのは、  
 着る 似る 煮る 干る 見る 惟みる  
 顧みる 鑑みる 試みる 射る 鑄る 居る 用ゐる 率ゐる  
 等の十數語だけである。

下一段活用  
五十音圖中えの一段にのみ活用し且これにれ、れ、の添はるもの即ち職の一語

か行變格活用  
五十音圖中か行のお、い、う三段に活用し且そのう段の音にる、れの添はるもの即ち來の一語

活用  
語幹 語尾

形

七 下一段 蹴

こ け ぐ き か  
れ る

け け け け け け  
よ れ る る る

え段  
(未然形) … ボールをけす。  
(連用形) … ボールをけたり。  
(終止形) … ボールをける。  
(連體形) … ボールをける人あり。  
(已然形) … ボールをけれども、あたらす。  
(命令形) … ボールをけよ。

八 か行 來

こ け ぐ き か  
れ る

こ ぐ ぐ ぐ ぐ き こ  
よ れ る る

お段(未然形) … 春は、やがてこん。  
い段(連用形) … 春きぬ。  
(終止形) … 春く。  
う段(連體形) … くる春ごとに花咲く。  
(已然形) … 春くれど、花咲かず。  
お段(命令形) … とくこよ。

九 さ行 變格 爲

そ せ す し さ  
れ る

せ す す す し せ  
よ れ る

え段(未然形) … 競技をせば、必ず勝たん。  
い段(連用形) … 競技をしはじむ。  
(終止形) … 競技をす。  
う段(連體形) … 競技をする少年あり。  
(已然形) … 競技をすれば、勝つ。  
え段(命令形) … 競技をせよ。

口語動詞の活用及び活用形

口語四段  
山あり(文) 終止  
山がある(口) 連體  
死ぬる人(文) 連體  
死ぬ人(口) 連體  
死ねば(文) 假定  
死ねば(口) 假定

第六章 口語動詞の活用及び活用形

口語動詞の活用は、四段・上一段・下一段・か行變格・さ行變格の五種である。今左に各の活用及び活用形を示さう。

一口語四段

降 有 死  
ら ら ら  
り り り  
る る る  
る る る  
れ る る  
れ る る  
ね る る  
ね る る

未然 連用 終止 連體 假定 命令  
文語のら行變格な行變格は、口語ではすべて四段活用になる。  
第五形は、口語では假定の意となる。  
雨が降れば、よさう。 あれば、いゝが。

口語上一段活用	終止 早く起くる人	連體 早く起くる人	假定 早く起くる人	終止 早く起くる人	連體 早く起くる人	假定 早く起くる人	終止 早く起くる人	連體 早く起くる人	假定 早く起くる人	終止 早く起くる人	連體 早く起くる人	假定 早く起くる人	終止 早く起くる人	連體 早く起くる人	假定 早く起くる人
---------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------

二口語上一段	着	終止	連體	假定	命令
起	起	起	起	起	起
文語上二段活用	終止	連體	假定	命令	
起	起	起	起	起	起
三口語下一段	蹴	終止	連體	假定	命令
受	受	受	受	受	受
文語下二段活用	終止	連體	假定	命令	
受	受	受	受	受	受
四口語か行變格	來	終止	連體	假定	命令
文語のか行變格	終止	連體	假定	命令	
受	受	受	受	受	受

下一段	段	二	下	段	一	上	段
か行	わ	ら	や	ま	は	な	か
行	行	行	行	行	行	行	行
蹴	植	枯	消	衰	統	教	尋
け	え	げ	け	え	え	め	べ
け	え	げ	け	え	え	め	べ
ける	え	げ	ける	え	え	め	べ
ける	え	げ	ける	え	え	め	べ
けれ	え	げ	けれ	え	え	め	べ
けよ	え	げ	けよ	え	え	め	べ
段	一	下	段	一	上	段	
か行	わ	ら	や	ま	は	な	か
行	行	行	行	行	行	行	行
蹴	居	射	見	干	似	着	懲
け	え	げ	け	え	え	め	べ
け	え	げ	け	え	え	め	べ
ける	え	げ	ける	え	え	め	べ
ける	え	げ	ける	え	え	め	べ
けれ	え	げ	けれ	え	え	め	べ
けよ	え	げ	けよ	え	え	め	べ

動詞活用形の對照

二	下	段 一 上	段 二 上	格 變	段 四	活
ばはなだたざさがかあ 行行行行行行行行	わやまはなからやまばはだたが 行行行行行行行行	らやまばはだたが 行行行行行行行行	さか 行行	な 行	ら 行	の語 例幹
統教尋撫捨交載投受得	居射見干似着	懲報試亡強閉落過生	爲來	死有	賣讀學習持推漕咲	未然
へねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	せこ	なら	らまばはたさがか	連用
へねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	しき	にり	りみびひちしぎき	終止
ふぬづつずすぐくう	ゐるみるひるにきる	るゆむぶふづつぐく	すく	ぬり	るむぶふつすぐく	連體
ふぬづつずすぐるう	ゐるみるひるにきる	るゆむぶるづるぐる	する	くる	るむぶふつすぐく	已然
ふぬづつずすぐくれ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	すれ	くれ	れれめべへてせげけ	命令
へねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	せよ	こよ	ねれれめべへてせげけ	

一	下	段 一 上	格 變	段 四	活	
ばはなだたざさがかあ 行行行行行行行行	わやまはなからやまばはだたが 行行行行行行行行	らやまばはだたが 行行行行行行行行	さか 行行	な 行	の語 例幹	
統教尋撫捨交載投受得	居射見干似着	懲報試亡強閉落過生	爲來	死有賣讀學習持推漕咲	未然	
へねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	しせ	なら	らまばはたさがか	連用
へねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	しき	にり	りみびひちしぎき	終止
へねでるてるせるける	ゐるみるひるにきる	るいみるひるぢちぎき	する	くる	るむぶふつすぐく	連體
へねでるてるせるける	ゐるみるひるにきる	るいみるひるぢちぎき	する	くる	るむぶふつすぐく	假定
へねでれれせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	すれ	くれ	ねれれめべへてせげけ	命令
へねでよよよよよ	ゐいみひにき	りいみびひぢちぎき	せよ	こい	ねれれめべへてせげけ	



動詞活用形の對照

下 一段	段 二 下	段 一 上	段 二 上	格 變	段 四	活 用	文
か 行	わ ら や ま ば は な だ た ざ さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	わ ら や ま ば は な か ら や ま ば は だ た が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	ら や ま ば は だ た が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	さ か な ら ら ま ば は た さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	さ か な ら ら ま ば は た さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	の語 例幹	
蹴	植 枯 消 衰 統 教 尋 撫 捨 交 載 投 受 得	居 射 見 干 似 着	懲 報 試 亡 強 閉 落 過 生	爲 來 死 有	賣 讀 學 習 持 推 漕 咲	未 然	
け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	せ こ な ら	ら ま ば は た さ が か	連 用	語
け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	し き に り	り み び ひ ち し ぎ き	終 止	
ける	うる ゆ む ぶ ふ ぬ づ つ ず す ぐ くら	ゐ る み る ひ る に き る	る ゆ む ぶ ふ づ つ ぐ くら	す く ぬ り	る む ぶ ふ つ ず ぐ くら	連 體	
ける	うる る る る る る る る る る る	ゐ る る る る る る る る	る る る る る る る る る	する くる ぬる	る る る る る る る る る	已 然	尾
けれ	うれ れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ	ゐ れ れ れ れ れ れ れ れ	る れ れ れ れ れ れ れ れ	す れ くれ ぬ れ	れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ	命 令	
けよ	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	せ よ こ よ ね れ	れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ		

段 一 下	段 一 上	格 變	段 四	活 用	口
か 行	わ ら や ま ば は な だ た ざ さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	さ か な ら ら ま ば は た さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	さ か な ら ら ま ば は た さ が か あ 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	の語 例幹	
蹴	植 枯 消 衰 統 教 尋 撫 捨 交 載 投 受 得	居 射 見 干 似 着	懲 報 試 亡 強 閉 落 過 生	爲 來 死 有 賣 讀 學 習 持 推 漕 咲	未 然
け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	し せ こ な ら	ら ま ば は た さ が か
け	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	し き に り	り み び ひ ち し ぎ き
ける	うる る る る る る る る る る る	ゐ る る る る る る る る	る る る る る る る る る	する くる ぬる	る る る る る る る る る
ける	うる る る る る る る る る	ゐ る る る る る る る る	る る る る る る る る る	する くる ぬる	る る る る る る る る る
けれ	うれ れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ	ゐ れ れ れ れ れ れ れ れ	る れ れ れ れ れ れ れ れ	す れ くれ ぬ れ	れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ
けよ	ゑ れ え め べ へ ね で て ぜ せ げ け え	ゐ い み ひ に き	り い み び ひ ぢ ち ぎ き	せ よ こ い ね れ	れ れ れ れ れ れ れ れ れ れ

口 語 尾

口語か行變格  
終止 人がくる(口)  
終止 早くこよ(文)  
命令 早くこよ(口)  
命令 早くこい(口)  
口語さ行變格  
未然 事をせず(文)  
未然 事をせぬ(口)  
未然 事をしな(口)  
終止 事をす(文)  
終止 事をする(口)  
自動詞

こよ は、こい となる。

五 口語さ行變格「爲」

未然	連用	終止	連體	假定	命令
し	せ	し	する	する	すれ
					せよ
					しろ

文語さ行變格の未然形 せ は、口語では せ 又は し となり、終止形 す は、する となる。

第七章 動詞の自他

動詞には自動詞と他動詞とがある。自動詞とは、動作がその主にとままるものをいひ、他動詞とは、動作がその主にとまらず、進んで他のものに働きかけるものをいふ。左の例を見よ。

自動詞  
消ゆ(主) 消ゆ(主)  
流る(主) 流る(主)

他動詞

他動詞 廻す (太郎獨樂を廻す)  
揚ぐ (三郎紙鳶を揚ぐ)

※他動詞は大抵「〇〇」といふ語をうける。但し「文」讀む窓の如く「を」を略することもある。又稀には「空を渡る」「門に入る」の「渡る」「入る」の如く、自動詞でありながら「〇〇」といふ語をうけるものもある。

動詞には(一)自動詞ばかりの動詞もあり、(二)他動詞ばかりの動詞もあり、(三)自他同形の動詞もあり、又(四)語のものが同じで、自他の活用のちがふ動詞もある。左の例を見よ。

一 自動詞ばかりの動詞。

眠る 有り 死ぬ 來る など

二 他動詞ばかりの動詞。

打つ 殺す 投ぐ 送る など

自動詞ばかりの動詞

他動詞ばかりの動詞

自他同形の動詞

三 自他同形の動詞。

吹く(か) 四 風吹く。(自)  
 牧童笛を吹く。(他)

閉づ(だ)上二 門閉づ。(自)  
 下女門を閉づ。(他)

垂る(ら)下二 尾垂る。(自)  
 犬尾を垂る。(他)

四 語のものが同じで、自他の活用のちがふ動詞。

育つ(た) 四 ……子育たん。(自)  
 育つ(た)下二 ……母子を育てん。(他)

足る(ら) 四 ……衣食足る。(自)  
 足す(さ) 四 ……仁君民の衣食を足す。(他)

見ゆ(や)下二 ……月見ゆ。(自)  
 見る(ま)上二 ……少年月を見る。(他)

語のものが同じで、自他の活用のちがふ動詞

動詞の音便

- 冷ゆ(や下二)……水冷ゆ。(自)
- 冷す(さ四)……下女水を冷す。(他)
- 盡く(か上二)……糧食盡く。(自)
- 盡す(さ四)……兵士糧食を食ひ盡す。(他)
- 落つ(た上二)……木の葉落つ。(自)
- 落す(さ四)……風木の葉を落す。(他)

第八章 動詞の音便

動詞の連用形は、助詞て(口語では て た)につゞくとき、發音の便宜上他の音に轉ずることがある。之を動詞の音便といふ。動詞の音便には左の四種ある。

い音便

- 一 い音便
  - 聞きて 聞いて。(文)
  - 聞い 聞。(口)

か行四段・が行四段の連用形の語尾なるきぎがいに轉じるもの

う音便  
は行四段の連用形の語尾なるひがうに轉じるもの

撥音便  
な行・ば行及びま行四段の連用形の語尾なるにびみが撥音んに轉じるもの

脱ぎて 脱いで。(文)

い音便の時にむの来る場合は語尾はにづる。

二 う音便 逢ひて 逢うて。(文)

逢う 逢。(口)

死にて 死んで。(口)

死ん 死。(口)

呼びて 呼んで。(文)

呼ん 呼。(口)

讀みて 読んで。(文)

讀ん 讀。(口)

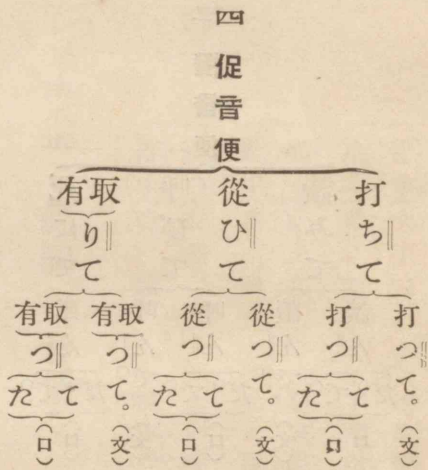
促音便  
た行・は行・ら  
行の各四段及  
びら行變格  
(口、ら行四  
段)の連用形  
の語尾なる  
ちひ・りが促  
音に轉じるも  
の

形容詞の活用

第九章

形容詞の活用及び活用形

形容詞も亦動詞のやうに、その語の下部が變化する。例へば、  
高し 正し といふ形容詞が、



ひく

く

語幹  
語尾  
活用

口語の形容詞

と變化する類である。而して 高 正し のやうに變化しな  
い部分を語幹といひ、く しく きれ くの  
やうに變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用と  
いふ。

(甲) 高

き  
けれ

(乙) 正し

き  
けれ

文語形容詞の活用は前例のやうに二種ある。甲を第一類の形  
容詞といひ、乙を第二類の形容詞といふ。  
口語では第一類第二類共に く い けれ と活用して、一様  
になつてしまふ。左の例を見よ。

高	い	く
正し	け	れ

形容詞の活用

未然形  
連用形  
終止形  
連體形  
〔已然形(文)  
假定形(口)〕

形容詞にも亦動詞のやうに未然・連用・終止・連體・已然(口語假定)の五形はあるが、命令形はない。左の例を見よ。

第一類 高

く (未然) 山高くば、眺望よからん。  
く (連用) 山高く聳ゆ。  
し (終止) 山高し。(山が高い)(口)  
き (連體) 高さ山を越ゆ。(高い山を越える)(口)  
けれ(已然) 山高ければ、眺望よし。(山が高ければ、眺望がよからん)(口、假定)

第二類 正し

く (未然) 心正しくば、人に敬せられん。  
く (連用) 心を正しく持つ。  
〇 (終止) 心正し。(心が正しい)(口)  
き (連體) 心正しき人を敬す。(心の正しい人を敬する)(口)

第二類の形容詞の終止形は語幹をそのまま用ひる

なほ左の表を見よ。

けれ(已然) 心正しければ、人に敬せらる。(心が正しければ、人に敬はれよう)(口、假定)

		語幹		形
(口)	(文)	(口)	(文)	
正し		高		未然
く	く	く	く	連用
く	く	く	く	終止
い	〇	い	し	連體
い	き	い	き	已然(文)
けれ	けれ	けれ	けれ	假定(口)

形容詞と動詞との結合

第十章

形容詞と動詞との結合 附形容詞の音便

形容詞の連用形は、動詞 あり 又は す と結合して動詞になる。左の例を見よ。



時  
過去 未來  
完了  
△印は古文にのみ用ひる  
以下これに倣へ  
むはんと發音し  
隨つて又んとも書く

打消  
普通  
推量の  
打消  
□印は係結の時にのみ用ひる  
以下これに倣へ

一時

未來 未 來 む 明日雪降らむ。 (終止 連體 已然 命令)

完了 了 ぬ 雨止みぬ。 (未然 連用 終止 連體 已然 命令)

たり 雨止みたり。 (未然 連用 終止 連體 已然 命令)

り 雨止めり。 (未然 連用 終止 連體 已然 命令)

二 打消

普通 普通 消 ず 花見に行かず。 (未然 連用 終止 連體 已然)

ざり 花見に行かず。 (未然 連用 終止 連體 已然)

推量の 推量の 消 まじ 雪は降らまじ。 (未然 連用 終止 連體 已然)

まじ 雪は降らまじ。 (未然 連用 終止 連體 已然)

らむはらんと發音し隨つて又んとも書く  
普通 推量の 推量の 過去の 推量の  
けむはけんと發音し隨つて又んとも書く  
意思のむ

三 推量

普通 普通 推量の 推量の 過去の 推量の

べし 雪降るべし。 (未然 連用 終止 連體 已然)

べかり 雪降るべかり。 (未然 連用 終止 連體 已然)

めり 雪降るめり。 (未然 連用 終止 連體 已然)

む 雪降らむ。 (終止 連體 已然)

まし 雪降らまし。 (終止 連體 已然)

けむ 雪降りけむ。 (終止 連體 已然)

四 受身

る 太郎犬に噛まる。 (未然 連用 終止 連體 已然 命令)

らる 太郎犬に噛らる。 (未然 連用 終止 連體 已然 命令)

らる は又動作が自ら起つて止め難き意に用ひられる。

らる 子の行末思はる。母上の事のみ案ぜらる。



自發

可能

當然のべし  
命令のべし  
意思のべし

使役

かやうな場合には、これを自發の助動詞といふ。

五 可能

る……一時間に三里は走らる。  
 らる……此の間には、我も答へらる。  
 べし……千引の岩も、くたくべし。  
 べかり美しさ名状すべからず。

未然 連用 終止 連體 已然  
 (れ) れ る る、 れ  
 未然 連用 終止 連體 已然  
 (られ) られ らる、 らる、 らるれ  
 未然 連用 終止 連體 已然  
 (べく) べく べし べき べけれ  
 未然 連用 連體 已然  
 (べから) べから べかり べかる べかれ

※べしには推量可能の外に左の種類がある。

子は親に孝なるべし。(當然) 明日出頭すべし。(命令)  
 今後は斷じて命令に背かざるべし。(意思)

六 使役

す……左官に壁を塗らす。  
 さす……大工に家を建て

未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (せ) せ す する すれ せよ  
 未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (させ) させ さす さする さすれ させよ  
 未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (しめ) しめ しむ しむる しむれ しめよ

尊敬

指定

詠歎

希望

る……兄上は、親類のうちに赴かる。(受身のるに同じ)

七 尊敬

らる……主人は、今朝旅行先より歸宅せらる。(同上)  
 す……澄宮殿下には、陸軍士官學校に御在學あらせらる。(連用)

八 指定

さす……皇后陛下には、慈惠醫院に行啓せさせ給ふ。(連用)  
 しむ……天皇陛下には、大觀艦式に臨ましめ給ふ。(しめ)

九 詠歎

なり……人は萬物の靈なり。  
 たり……我は、我たり。  
 なり……秋の野に人まつ蟲の聲すなり。  
 けり……あやしきものは心なりけり。

未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (なら) なら なり なる なれ なれ  
 未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (たれ) たれ たり たる たれ たれ  
 未然 連用 終止 連體 已然  
 (なり) なり なり なる なる  
 未然 連用 終止 連體 已然  
 (けり) けり けり ける ける けれ

一〇 希望

たし……花見に行きたし。

未然 連用 終止 連體 已然  
 (たく) たく たし たき たけれ  
 未然 連用 終止 連體 已然  
 (まほしく) まほしく まほしく まほし

比説

まほし健康にてあらまほし。  
連體 まほしき 已然 まほしけれ  
 二 比説 ごとし 歳月は流るゝごとし。  
未然 ごとく 連用 ごとく 終止 ごとし 連體 ごとき

第十二章 口語助動詞の種類活用及び活用形

口語助動詞は時打消推量受身可能使役尊敬對話指定希望の十種に分れ、それゝ活用及び活用形を具へてゐる。左表を見よ。

口語助動詞の種類

口語助動詞の活用及び活用形

時 完了 過去 未

一 時  
 過 去 た …… 昨日、雨が降つた。  
未然 たり 連用 たり 終止 た 連體 たれ  
 完 了 た …… 今しがた、風がしづまつた。(同上)  
終止 連體  
 未 來 う …… やがて雨が止まう。  
終止 連體  
 よう …… もうぢきに空が霽れよう。  
終止 連體  
未然 連用 終止 連體 假定 假定  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

打消 普通 推量 打消

二 打消  
 普通 消 ない 風は吹かない。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定  
 推量 消 ない 風は吹かない。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定  
 なかつ なかつた。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定  
 らしい やがて天氣になるらしい。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定  
 う …… まさか雪は降らないであらう。  
終止 連體

三 推量

よう …… 彼は、定めて何かと心配してゐよう。  
終止 連體  
 星う よう は又、意思を示すことがある。  
終止 連體

推量 意思のうよう

四 受身

れる …… 犬に追はれる。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定 命令 命令  
 られる 馬に蹴られる。  
未然 連用 終止 連體 假定 假定 命令 命令  
 れる …… 一日に十里は歩かれる。  
受身の れる に同じ  
 られる 君の球は、僕にも受けられる。(受身の られる に同じ)

受身

五 可能

られる 君の球は、僕にも受けられる。(受身の られる に同じ)

可能

使役

せる…左官に壁を塗らせる。  
 させる大工に家を建てさせる。  
未然連用終止 連體 假定 命令  
 (せ) せ せる せる せれ せよ  
未然 連用 終止 連體  
 (させ) させ させる させる  
假定 命令  
 (させれ) させれ させよ

尊敬

七 尊敬  
 れる…父君は、よく字を書かれる。  
 られる母上は、用達に出かけられる。  
(受身の れる に同じ)  
(受身の られる に同じ)

對話

八 對話  
 ます…雨が降ります。  
未然 連用 終止 連體 假定 命令  
 (ませ) まし ます ます ますれ ませ  
 (ませ) まし ます ます ますれ ませ

指定  
普通 普通の指  
定 定對話の指

九 指定  
 なら…前途は、有望だ。  
普通 普通の指  
定 定對話の指  
 (なら) なり 連用 連體  
 (だ) だ 終止 終止  
 (だ) だ 連用 終止  
 (だ) だ 連用 終止

希望

一〇 希望  
 たい…優勝旗を得たい。  
 たかつ 第一着になりたかつた。  
未然 連用 終止 連體 假定  
 (たく) たく たい たい たい たい  
未然 連用 終止 連體 假定  
 (たから) たから たい たい たい たい  
未然 連用 終止 連體 假定  
 (たか) たか たい たい たい たい

### 第十三章 副詞の用法

副詞の用法

副詞には、(一)直接に動詞・形容詞を限定する場合もあり、(二)直接に他の副詞を限定する場合もあり、(三)語を隔てて動詞・形容詞を限定する場合もあり、(四)又直接に或は語を隔てて動詞・副詞・形容詞の用をなす句を限定する場合もある。左の例を見よ。

一 直接に動詞・形容詞を限定する場合  
 風がたいそう ) 吹く。 (動詞)  
 善をなすこと、最も ) 樂し。 (形容詞)

二 他の副詞を限定する場合  
 いと ) 静かに ) 物語る。 (動詞)  
 たいそう ) 静かに ) 話す。 (動詞)

三 語を隔てて動詞・形容詞を限定する場合  
 頗る ) 山水の景に富めり。 (動詞)  
 少しも怒り怨んでゐる様子が ) ない。 (形容詞)

四 直接に或は語を隔てて動詞・形容詞・副詞の用をなす句を限定する場合

副詞 決して 人を欺くべからず。  
 形容詞句 形 半日の道です。(口)  
 副詞 たつた )  
 副詞句 十秒の差にて敗れたり。  
 副詞 纔かに )

第十四章 接續詞の種類

接續詞の種類

接續詞には、(一) 及び、その上(口)などのやうに、もの添ひ加はる意を示すものもあり、(二) 或は、それとも(口)などのやうに、彼か此かと選擇する意を示すものもあり、(三) 然らば、それゆゑ(口)などのやうに、原因や理由を示すものもあり、又(四) されども、ところが(口)などのやうに、反對の意を示すものもある。今各種類の接續詞のおもなものを左に擧げよう。

累加

一 累加

又 且 尙 及び まして しかのみならず(のみならず)  
 (口) そのうへ さうして そして それに それから

選擇

二 選擇

又 或は 若しくは (文・口)  
 (口) それとも (口)

原因理由

三 原因理由

然れば 然らば されば さらば かるが故に  
 故に 隨ひて 因りて 間 (文)  
 それですから(ですから) それゆゑ それで(で) そ  
 れでは(では) それなら さうすると(すると) さう  
 したら(したら) そこで (口)  
 されども 然れども (文) 但し 併し 尤も  
 處 しかしながら さりながら (文・口)

反意

四反意

けれども	それです	が	ですが	それです	のに	です
のに	それで	す	けれども	です	けれども	それで
も	でも	と	ころが	が	口	

感動詞の種類

第十五章 感動詞の種類及び用法

感動詞には、(一)文の首につくものと、(二)文の末につくものとある。今そのおもなものを口語と文語とに分けて左に表示しよう。

文

あな……あなかしこ。  
 あはれ……あはれ悲しきかも。  
 いざ……いざ行かん。  
 いで……いで御話承らん。  
 すは……すは火事よ。  
 やよ……やよ待て。

文

や……あゝうれしや。  
 よ……すは火事よ。  
 は……吾妻はや。  
 も……あはれ悲しも。  
 な……わが身悲しな。  
 かも……嬉しきかも。

文の首につく感動詞  
文の末につく感動詞

一 首文のくにもつ

口

あら……あらをかしい。  
 あれ……あれごらんなさい。  
 いしえ……いしえちがひます。  
 いえ……いえさうではない。  
 おや……おやさうですか。  
 さあ……さあお上りなさい。  
 さて……さてこまつたなあ。  
 どれ……どれ出かけよう。  
 なに……なにかまふものか。  
 はい……はいさやうです。  
 まあ……まあ立派なこと。  
 やあ……やあ御機嫌よう。

二 末文のくにもつ

口

かな……美なるかな。  
 かし……勉強せよかし。  
 よ……さあ大變だよ。  
 な……綺麗ですな。  
 ね……よいお天気ですな。  
 ぜ……違約してはこまりませぬ。  
 ぞ……落第してはいけませんぞ。  
 は……こまつた事が出来たは。  
 はい……感心な事だはい。

助詞の種類

第十六章 助詞の種類及び用法

助詞には、(一)體言にのみ添はるものと、(二)種々の語に添はるもの

と(三)活用語即ち動詞・形容詞助動詞に添はるものとの三つの種類があつて、各語ともそれ／＼その用法を異にしてゐる。今そのおもなものを左に挙げ、且その用法を説明しよう。

體言に添はる助詞

一 體言に添はる助詞

の の の が が の が が の の  
 (口) (口)  
 兄の帽子。(所有)  
 米のなる木。(動作状態の主)  
 我が庭。(所有)  
 雨が降る。(動作状態の主)  
 花を觀る。(動作の目的)  
 山に登る。(場所)  
 前へ進め。(方向)  
 山と川と。(事物の並列)  
 友人と遊ぶ。(共同)  
 歐洲より歸る。  
 歐洲から歸る。  
 (起點)

種々の語に添はる助詞

二 種々の語に添はる助詞

より まで にて まで ば も ぞ も なむ こそ し や か だに ども  
 (口) (口)  
 花より團子。(比較の標準)  
 神戸まで出迎ふ。(到着點)  
 ペンにて書く。  
 ペンで書く。  
 (方便)  
 墨は黒し。(事物の抽出)  
 行をば慎む。(同上)  
 學も徳も高し。(事物の一致)  
 月をぞ愛づる。(指定)  
 月をなむ愛づる。(指定)  
 月をこそ愛づれ。(強き指定)  
 必ずしも然らず。(同上)  
 ありやなしや  
 あるかなさか。(疑問)  
 風邪一つだにひかず。  
 風邪一つでも引かない。  
 (重きを言外に含ませる)

すら	禽獸すら恩を知る。	(同上)
さへ	禽獸でさへ恩を知つてゐる。	(同上)
さへ	暴風さへ加はる。	(添加)
まで	暴風までが加はる。	(添加)
のみ	粥のみ	(限定)
ばかり(文口)	ばかり	(限定)
な	泣くな、笑ふな。	(禁止)
な	泣きそ、な、笑ひそ。	(禁止)
ば	乞はば、與へん。	(假定、順當な接続)
ば	乞へば、與へよう。	(假定、順當な接続)
の	乞ふので、與へる。	(確定、順當な接続)
から	乞ふから、與へる。	(確定、順當な接続)
ど	乞へど、	(確定、不順當な接続)
ども	乞へども、與へず。	(確定、不順當な接続)

動詞・形容詞・  
助動詞に添は  
る助詞

三  
活用語即ち  
動詞形容詞  
助動詞に添  
はる助詞

けれど	けれど、	續
けれども(口)	乞ふ	乞へなす。
とも	乞ふとも、與へじ。	(假定、不順當な接続)
ても	乞うても、與へまい。	(假定、不順當な接続)
を	梅は咲ける	を、鶯は來鳴かず。
に	梅は咲いてゐるのに、鶯は來て鳴かぬ。	(對 反)
に	雪は降りしが、風は吹かざりき。	
が	雪は降つたが、風は吹かなかつた。	
が	歩み	つゝ、語る。
つゝ	ながら	ながら
ながら	あるきながら語る。	(同時に起る動作)
ながら(口)	公園にゆきて花を観る。(接続)	
て	何事もなさで、日を暮す。	
で	何事もしないで、日を暮す。	(打消)
ないで	(口)	

ず<sup>レ</sup>に  
 な  
 なむ  
 ばや

(口) 何事もせず<sup>レ</sup>に、日を暮す  
 早く行かな  
 花咲かなむ  
 行きて見ばや

(願望)

# 後篇

## 第一章 品詞の轉成

或品詞は、その形のまゝで他の品詞に轉ずることがある。之を品詞の轉成といふ。

品詞の轉成に左の種類がある。

一 轉來の名詞 動詞の連用形、形容詞の語幹、形容詞の連用形等が名詞に轉じたもの。

螢の光。 氷の刃。

白のシャツ。 黒の帽子。

遠くの親類。 近くの人。

二 轉來の代名詞 名詞が代名詞に轉じたもの。

品詞の轉成

轉來の名詞

轉來の代名詞



轉來の副詞

私は、今君のお宅へいくところなんだ。(口)  
御前 御身 わらは なども、亦此の例である。

三 轉來の副詞 名詞、動詞の連用形、形容詞の連用形などが副詞に轉じたもの。

けさ鶯の初音を聞きたり。

あれはつまり僕の失策だ。(口)

早く起き、遅く寝ぬ。

轉來の接續詞

四 轉來の接續詞 名詞、動詞の連用形などが接續詞に轉じたもの。

本日缺席仕候間、御届申上候。

暑さ厳しく候處、御障無之候や。

松島、天橋立及び嚴島を日本三景といふ。

練習

次の文から轉來語を擇び出して、それを説明せよ。

- 1 始あらざることなし、よく終あること鮮し。
- 2 今日雨降らず、明日雨降らずんば、作物枯れ果てん。
- 3 奉公の誠に於ては、僕は何で君に劣らうぞ。(口)
- 4 母の思は空に滿ち、ゆくへも知らず、はてもなし。
- 5 祖先の祭を慎み、子孫の教を忽にせず。
- 6 荒削りの山の肌が頂に近く、偃松の暗い緑をなすつた處に、一匹の獸が小さく見えた。(口)
- 7 赤、白、青の三艇は互にまけじ劣らじと、秘術を盡して進んだが、此の日の名譽は早く青艇の上に輝いた。(口)
- 8 幽靈の外に野衾も出るといふ話ですから、氣をおつけなさい。二時間もたつてお歸りがなかつたら、私が迎へに行きます。(口)
- 9 私も明日參上仕るべく候間、其節御目に懸り、くはしく御話申上

ア 得  
ハ 一  
カ 一  
ク 一  
ケ 一  
コ 一  
ク 一  
ケ 一  
コ 一  
ク 一  
ケ 一  
コ 一

語の構成

疊語

絶 堪 耐  
ハセフ  
ヤコ  
2  
サー (Hand)

- ぐべく候。
- 10 遠くなり近くなるみのはま千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知る。
- 11 木立の篩へる月のあかりに残りの雪の色冴えて、森の下道はるかなる霞に落つる影もなし。
- 12 有合せの籠に入れて飼つた藪鶯が折々下手な聲でほうほけきやうと鳴く。寐覺の床の上で聞くのが楽しみになつた。(口)

第二章 語の構成 その一

語が二個以上結びついて一語を作ることゝを語の構成といふ。これに疊語・熟語・接頭語・接尾語の四種ある。

- 一 疊語 次の雙柱の例のやうに、同じ語が重なつて一語となつたもの。  
木々の梢に色々の花咲けり。

よくく健康に注意したまへ。

疊語には左の種類がある。

- 一 疊語の名詞 山々。 國々。 人々。
- 二 疊語の代名詞 われく。 たれく。
- 三 疊語の形容詞 長々し。 軽々し。 さかくし。  
なれくし。 美々し。 花々し。
- 四 疊語の副詞 時々。 日々。 それく。 追ひく。  
見すく。 とくく。 よくく。 唯々。 尙々。
- 五 疊語の感動詞 いさく。 あはれく。(文)  
おやく。 さあく。(口)

※名詞の疊語は、名詞又は副詞として用ひられる。  
※代名詞の疊語は、代名詞又は副詞として用ひられる。

四、a i u e e  
三、l i u e l  
二、l i u e l  
一、i i i i i i i i  
ト、i i i i i i i i  
上、i i i i i i i i  
下、i i i i i i i i  
ナ、カ、コ、キ、ク、ケ、コ  
ラ、チ、リ、リ、リ、リ、リ、リ

● 動詞の連用形終止形の疊語、及び形容詞の連用形の疊語は、副詞として用ひられる。

● 形容詞の語幹を重ね、これに「し」の語尾を添へたもの、及び副詞感動詞を重ねたものは、品詞はかはらないが、意味が強くなる。

● 動詞の連用形又は名詞を二つ重ね、これに「し」の語尾を添へて、疊語の形容詞に活用させることがある。

● 疊語の形容詞は、すべて第二類の活用になる。

二 熟語

左の雙柱の例のやうに、相異なる二個以上の單語が相合して一語を作つたもの。

朝日に匂ふ山櫻花。

有り難き仰言に、一門嬉し涙にむせぶ。

熟語には左の種類がある。

一 熟語の名詞

夕日 春風 (名詞・名詞)

櫻狩 雨乞 (名詞・動詞)

夜寒 足弱 (名詞・形容詞)

請取 割合 (動詞・動詞)

狩人 織物 (動詞・名詞)

賣高 着せ長 (動詞・形容詞)

遠淺 薄青 (形容詞・形容詞)

淺瀬 くやし涙 (形容詞・名詞)

苦笑 長生 (形容詞・動詞)

● 熟語の名詞には、玉櫛筒 蚊遣火 食はず嫌ひ したり顔 往復はがき 書留手數料 など三語以上の結合から成るものもある。

二 熟語の動詞

熟語の動詞

Handwritten notes at the top of the page, including 'けりし' and '形' with arrows pointing to the text below.

熟語

熟語の名詞

熟語の形容詞

物語る。心ざす。(名詞・動詞)  
 成り立つ。落し入る。(動詞・動詞)  
 近寄る。長びく。(形容詞・動詞)

※熟語の動詞は、名詞、動詞の連用形又は形容詞の語幹に動詞を結びつけたものである。

三 熟語の形容詞

名高し。奥ゆかし。(名詞・形容詞)  
 有り難し。見にくし。(動詞・形容詞)  
 細長し。暑くるし。(形容詞・形容詞)

※熟語の形容詞は、名詞、動詞の連用形又は形容詞の語幹に形容詞を結びつけたものである。

熟語の副詞

四 熟語の副詞

誠に 素より (名詞・助詞)  
 總べて 願はくは (動詞・助詞)  
 すこしも とくに (形容詞・助詞)  
 たゞに さぞ (副詞・助詞)

※はくは ふ の延音である。

※熟語の副詞は、多くは名詞、動詞、形容詞又は副詞に助詞を結びつけたものである。

※この外、ほしいまゝに やゝもすれば などのやうに、多くの語から成り立つてゐる熟語の副詞もある。

五 熟語の接續詞

然らば 随つて (動詞・助詞)  
 なかんづく しかのみならず (多くの語の結合)

※熟語の接續詞は、主として動詞と助詞との結びついたものであるが、

熟語の接續詞

連濁 轉音 約音 省音 加音

まゝ多くの語が結びついて出来たものもある。  
※ 數語相合して疊語又は熟語を作るときは、まゝ元の音を變へることがある。之を分けて、連濁、轉音、約音、省音、加音の五つとする。連濁とは、次の語の頭の音の濁ることをいひ、轉音とは、上の語の末の音の他音に轉ずることをいひ、約音とは二音の約まつて一音となることをいひ、省音とは、或音の全く失せることをいひ、加音とは、或音の加はることをいふ。

- 一 連濁 いしはし(石橋)：いしばし。しかしか(然々)：しかじか
- 二 轉音 あめと(雨戸)：あまど。くちわ(口輪)：くつわ(轡)
- 三 約音 あのかた(彼方)：あなた さしあぐ(差上ぐ)：ささぐ(捧ぐ)
- 四 省音 すみすり(墨磨)：すずり(硯) ふみばこ(文箱)：ふばこ
- 五 加音 やか(八日)：やうか むか(六日)：むいか

練習

次の語の品詞を示し、且その構造を説明せよ。

- 川々。 おちいる。 取り別けて。 書取。 見ぐるし。
- 旅立つ。 神々し。 主として。 遠ざく。 恐るく。
- かへすく。 這ふく。 差支。 況や。 垂んとす。

次の文から疊語及び熟語を擇び出せ。

- 1 あさがほにつるべとられてもらひ水。
- 2 古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。
- 3 はやたそがれの影よせぬ。風おもむろに吹きかよふ都大路の夏げしき。洗ひすてたる夕立の名残柳に玉とめて。
- 4 新緑の頃の青々と晴れた空には、高い木立や茂つた竹林などが最もよく折合つて見える。(口)
- 5 うれし舟の旅、うかぶ鷗、たつ千鳥。あれく波間に、見よく岩間に。山々浦々、沖漕ぐ釣舟ながらに見つゝぞゆく。
- 6 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を

浴びて、珊瑚珠のやうに輝いてゐる。(口)  
7 東の障子あけ放ちたるところより見下せば、みづくしき稻田の彼方、暮れ行く濱邊の家々を隔てて、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。

8 頃しも鎌倉より勢ぞろへの沙汰俄かに國々に傳はりぬ。常世は時こそ來れと、やせ馬にむちうつて馳せつたり。

9 富士の中腹に群がる雲は、黄金色に染まつて、見るがうちに様々の形に變ずる。連山の頂は白銀の鎖の様な雲が次第に北に走つて、終には暗澹たる闇のうちに没してしまふ。(口)

第三章 語の構成 その二

接頭語

接頭語

をいふ。

うひ陣の功名せよ。

左の雙柱の語のやうに、或語の頭につく獨立しない語

一刀たばさみて、かけ出す。

風采が、頗るけ高い。(口)

身體が、何處となくか弱い。(口)

今重な接頭語を左に示さう。

い……います。

いち……いち早し。

いや……いや増す。

うひ……うひ産。

えせ……えせもの。

お……お宮。

おん……おん志。

か……か細し。

き……き絲。

け……けうとし。

御……御奮發。

さ……さ夜。さ迷ふ。

す……す足。

た……たなびく。たやすし。

はつ……はつ春。

ひが……ひが目。

接尾語

不……不出來。      ほの……ほの見ゆ。  
 ま……ま菰。ま心。      み……み雪。  
 を……を田。を暗し。  
 接尾語 左の雙柱の語のやうに、或語の下につく獨立しない語  
 をいふ。

友だちと楽しげに遊ぶ。  
 木の葉黄ばむ。

今、重な接尾語を左に示さう。

一體言の下について、複數又は數の多いことを示すもの。  
 ども……私ども。      家來ども。      ら……子供ら。      彼ら。  
 がた……あなたがた。      皆様がた。      たち……男たち。      君たち。  
 ばら……殿ばら。      奴ばら。

二 體言の下について、敬意を表すもの。

さま……神さま。      どなたさま。  
 どの……大臣どの。      太郎どの。

君……山田君。      良雄君。

三 形容詞の語幹について、名詞を作るもの。

さ……長さ。      嬉しさ。      み……深み。      楽しみ。  
 げ……重げ。      悲しげ。

四 名詞、形容詞の語幹等について、動詞を作るもの。

めく……時めく。(か四)      なふ……伴なふ。(は四)  
 ばむ……黄ばむ。(ま四)      がる……嬉しがる。(ら四)  
 まる……高まる。(ら四)      ぶ……大人ぶ。(ば上二)  
 さぶ……神さぶ。(ば上二)

五 名詞等について、形容詞を作るもの。

けし……静けし。(第一類) らし……男らし。(第二類)

がまし……をこがまし。(第二類)

六 名詞・動詞等について、副詞を作るもの。

がてら……月見がてら。 すがら……道すがら。

づつ……少しづつ。 まにく……思ふまにく。

※まにく……は、略して まゝに ともしふ。

練習

次の文の中の疊語・熟語・接頭語・接尾語を示せ。

- 1 目に青葉、山ほととぎす、初鰹。
- 2 追々夜寒になるゆゑ、皆々薄着を戒むべし。
- 3 足の痛みは異ならねど、頭の重さはやゝ薄らぎたり。
- 4 犬どもあまた集りて、一匹の白兔を高みに追ひ上げたり。

5 手前には、折悪しく、持合せがございません。(口)

6 冷水摩擦は冷水浴のやうにつめたくないから、か弱い人でもたやすく行ふことが出来る。(口)

7 去るものは日々に遠ざかり、来るものは刻々に近づく。

8 友だち來れ、われらが友、とくく來れ、いざやこら。

9 氣候も大きに春めきたれば、近日弟妹どもを打ちつれて彼を音なはんとす。

10 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹、み空の花を星といひ、わが世の星を花といふ。

11 よろしい、とにかく明日の總攻撃見合せの一事だけは、拙者一命にかけて御引受申します。(口)

12 我は海の子、白波のさわぐ磯邊の松原に煙たなびく苦屋こそ、我がなつかしき住家なれ。

13 幸に風は追手、帆を張つていよく洞庭湖の中に乗入らうとす



る。日はいつしか三つの小島の間に落ちて、見る／＼深紅の眞玉が湖心に沈む。(口)

14 燈火の光晴れたる夜の星にまがひていと涼しげなるに、たなびく雲の絶間より夕日の影花やかに匂ひ出でたる、いとをかし。

15 富士の山肌は遠くから見れば、先づ一色黒く見えるばかりであるが、決して唯の黒さではない。その中に緑青に似た青みを含み、薄く散らばつたまだらな朱の色もそこらに吹出でゐる。(口)

第四章 動詞と助動詞との接続 その一

動詞と助動詞との接続には一定の法則がある。今左に之を説明しよう。

動詞の未然形に続く助動詞

動詞の未然形に続く助動詞

(い)む ず ざり じ まし しむ まほし は、すべての動詞

の未然形に続く。

四……誘は  
ら變……有ら  
な變……死な  
か變……來  
さ變……爲  
上二……起き  
下二……捨て  
上一……見  
下一……蹴

む……花見に友人を誘はむ。  
近きうちに、學期試験有らむ。  
ず……老いず死なずの薬もがな。  
ざり……彼は、終に訪ひ來ざりき。  
じ……不孝の振舞をばせじ。  
誰が家も、未だ起きじ。  
まし……何れをか捨てまし。  
しむ……太郎をして、ボールを蹴しむ。  
まほし……早く歸りて、母の顔を見まほし。

※あ行下二段の動詞 得 の未然形 得しむ を添へて 得しむ  
といふべきを 得せしむ といふことは、中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

※上一段活用の未然形 着 見 射 等に しむ を添へて、着しむ

む 見しむ 射しむ などいふべきを、着せしむ 見せしむ 射しむ  
 せしむ などいふのは、皆誤である。勿論下二段活用の未然形 着  
 せ 見せ に しむ を添へて、着せしむ 見せしむ などいふ  
 のは、わけがちがふので、それは正しい。

母、お花に人形の着物を着せしむ。  
 太郎、次郎をして三郎に繪本を見せしむ。

(ろ) す は、四段・ら行變格な行變格の未然形に續き、らる

さす は、その外の動詞の未然形に續き、り は、さ行變格に  
 限つてその未然形に續く。

四……誘は  
 ら變……居ら  
 な變……死な  
 か變……來

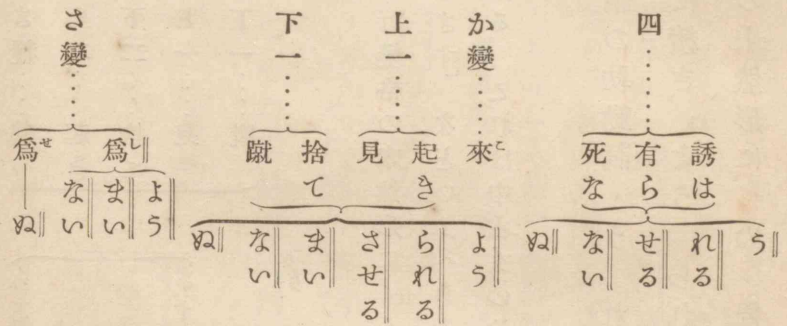
る……花見に誘はる。  
 父上は宅に居らる。  
 す……潔く死なす。  
 先生、早くも學校に來らる。

さ變……爲  
 上二……起き  
 下二……捨て  
 上一……見  
 下一……蹴

らる 主人も、大いに満足せらる。  
 馬丁、馬に蹴らる。  
 毎朝五時に子供を起きさす。  
 下女に塵を捨てさす。  
 子供に展覽會を見さす。  
 人皆感心せり。

※さ行變格の未然形に らる さす を添へて 「出席せらる」「掃除  
 せさす」などいふべきを、「出席さる」「掃除さす」などいふことが  
 ある。これは中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。

(は) 口語の助動詞 うれる せる は、四段活用の動詞の未然  
 形に續き、よう られる させる まい は、四段以外の動  
 詞の未然形に、ぬ ない は、總べての動詞の未然形に續く。



花見に誘はれる。  
 明日は晴天で有らう。  
 潔く死なせる。  
 今日、来よう。  
 馬に蹴られる。  
 下女に塵を捨てさせる。  
 そんなものは、見まい。  
 起床喇叭が鳴つても、まだ起きない。  
 悪戯をしない。

ぬ  
 係  
 文

練習

※ぬ は、さ行變格の未然形 せ につゞき、ない は、その し につゞく。  
 ※よう まい は、さ行變格では未然形 し につゞいて、次のやうになる。 せ に續けるのはよくない。  
 ※られる させる は、さ行變格の未然形 し につゞく時には、約まつて次のやうになる。  
 しられる しさせる

次の文の中から動詞の未然形につゞく助動詞を擇び出し、且その種類活用及び活用形を示せ。

1 仰げば松の葉々々が白金のピンを數へるやうに讀まれ俯く砂にはまた一葉々々の影が鮮かに數へられる。(口)

2 寄手の追付かぬ内に、いざ御暇申さん。(口)

- 3 御身は年若で、ゆくさきが長いから、怠らず勉めたなら、必ず成し遂げられるであらう。(口)
- 4 山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心我があらめやも。
- 5 初夏の滴る喜を心ゆくばかり吸はうとするには、アルプスまで登らなければならぬ。アルプスは見きはめのつかぬお花畑の夢幻郷だ。(口)

次の文の○○の處に適當な助動詞を挿入せよ。

- 1 下男にいひつけて、門を閉ぢ○○。(口)
- 2 今日、風が烈しいから、海が荒れ○○。(口)
- 3 彼の演説は、來賓一同に傾聽せ○○たり。
- 4 部下に命じて出發の準備を整へ○○。
- 5 知ら○○を知ら○とせよ。
- 6 今日の水泳競技は、如何にもおもしろさうだから、いつてみ○○。太郎もつれていつてやら○。(口)

次の文の中に、中古文の法則に合しないところや、誤つたところがあつたら、之を示せ。

- 1 請ふ、我をして一言するを得せしめよ。
- 2 書生に門前の掃除をさす。
- 3 義經、那須餘一をして扇眼を射せしむ。
- 4 通券所持の人々は、東の入口より入場さるべし。
- 5 余は、嘗て彼に辛き目を見せさせられたり。

第五章 動詞と助動詞との接續 その二

動詞の連用形に續く助動詞

動詞の連用形に續く助動詞

いけり つたり(了完) けむ たし は、總べての動詞の連用形に續き、ぬ(了完) は、な行變格以外の動詞の連用形に續き、きは、か行變格以外の動詞の連用形に續く。

Handwritten notes at the top of page 68, including characters like '死' (death) and '来' (come).

な變…死に  
 四…咲き  
 ら變…有り  
 か變…來  
 さ變…爲  
 上二…起き  
 下二…捨て  
 上一…見  
 下一…蹴

花咲きぬ。  
 塵を捨てぬ。  
 戦ひて死にき。  
 花も心有りけり。  
 散らぬ間にとて、早く起きけり。  
 つ…學友遊びに来つ。  
 たり…公園に散歩したり。  
 けむ…いづこに捨てけむ。  
 たし…マッヂを見たり。  
 ボールを蹴たり。

※完了のぬ は、な行變格には續かぬ。  
 ※きは、か行さ行の兩變格に續く時には次のやうな例外がある。

か變…來 未然…こ  
 し…こし方、行く末。  
 しか…こしかど、行かざりき。

Handwritten notes at the top of page 69, including characters like '来' (come) and '死' (death).

連用…き  
 し…きし方、行く末。  
 しか…きしかど、行かざりき。  
 未然…せ  
 し…遠足せし事あり。  
 しか…遠足せしかど、疲れざりき。  
 連用…し  
 し…遠足しき。  
 しか…遠足ししかど、疲れざりき。

※さ行變格では、「せし事」「禁せしかば」のやうに、未然形に「し」を續ける。「しし事」「禁じしかば」のやうに連用形に續けてはならぬ。  
 ※四段活用は、さ行でもやはり「爲しし事」「盡しし人」と連用形につづけるのが中古文の法則である。しかし、今は、「爲せし事」「盡せし人」のやうにいふことも許容されてゐる。

(ろ) 口語の た(過去) ます たい は、すべての動詞の連用形に續く。

四…… 咲き  
 有り  
 た(だ)…… 花が咲いた。  
 夏が来た。

死に 来き 變か 變か 爲し 起き 見み 捨す 蹴く

上 下

友人が死にんだ。 机が有ります。 五時に起きます。 ボールを蹴くます。 勉強がしたい。 相撲が見たい。 塵を捨てたい。

たい ます

練習

次の文の中から動詞の未然形及び連用形につゞく助動詞を選び出し、且その種類活用並に活用形を示せ。

- 1 櫻咲きなばつれだちて野山に遊ばんと友にいひやりけり。
- 2 旅行したきは山々なれど、父上の許させ給はぬをいかにせん。
- 3 長男は農學校を卒業させて實業に就かせ、次男は陸軍士官學校に入れて陸軍士官にした。

4 燈火を中心とした病牀六尺の天地は、何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界であつた。

5 のぼらば瀧につゞくらん、岩きりとほしゆく水の流の岸に小屋見えて、あやふくかゝる水車。たゞかりそめの板葺にのせたる石も苔むしぬ。さゝぬ窓より見入るれば、守りたる人はまだ若し。

次の文の○○の處に適當な動詞の語尾を挿入せよ。

- 1 時機の到るを待○○ぬ。
- 2 昨朝、神戸を出發○○き。
- 3 いたづらに過○○し月日こそ惜しけれ。
- 4 これ、我が最も愉快に感○○し一事なり。
- 5 みづから犯○○し罪は、免るべからず。

次の句の中に、中古文の法則に合はぬところや、誤つたところがあつたら、之を改めよ。

費せし金。 講じし本。 着ならせし衣。  
 言ひ出せし折。 語りつくしし時。 父にておはせし人。  
 任せし事柄。 敵をまかせし刹那。

第六章 動詞と助動詞との接続 その三

動詞の終止形  
に續く助動詞

動詞の終止形に續く助動詞

(い) まじ らむ らし べし べかり めり なり(歎詠) はら行

變格以外の動詞の終止形に續く。

四……咲く 今日、訪ひ來まじ。  
 な變……死ぬ 過失ありとも、捨つまじ。  
 か變……來 花咲くらむ。  
 さ變……爲 この馬人を蹴るらし。  
 上二……起く 朝は、早く起くべし。

下……捨つ  
 上……見る  
 下……蹴る

べかり……死ぬべかりし命をながらふ。  
 めり……彼は、此方を見るめり。  
 なり(歎詠)……秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

(ろ) 口語の らしい は、總べての動詞の終止形に續き、ま  
 は、四段活用の動詞の終止形に續く。

四……死ぬ 咲く  
 有る  
 か變……來る  
 さ變……爲る  
 上……起きる  
 見る  
 下……捨てる  
 蹴る

もう死ぬらしい。  
 尋ねて來るらしい。  
 上京するらしい。  
 早く起きるらしい。  
 景色を見るらしい。  
 廢物は、惜まず捨てるらしい。  
 あの荒馬は、馬丁を蹴るらしい。

四	...	死ぬ	咲く
有る			
		まい*	
		まだ死ぬまい。	花は、咲くまい。
		そんな事は、あるまい。	

まい は、四段活用以外の動詞には、その未然形に續く。

練習

次の文の中から動詞の未然形連用形及び終止形につゞく助動詞を擇び出し、且その種類・活用及び活用形を示せ。

- 1 大禹は聖人なれども寸陰を惜みき、衆人に至りては當に分陰を惜むべし。
- 2 人を排して自ら進まんとするが如きさもしき心は、夢にもおこすまじきものなり。
- 3 冬に至りぬれば、課もまだ満たざるに、日暮れんとすることたびたびにて、西向なる竹縁の上に机を持出でて書き終へぬることもありき。

4 花見に行きたければ行くがよい。今日は雨も降らないし、風も吹くまいから。(口)

5 夏の夜の螢は、亂れ飛んでは、この頃の曇りがちの空に何の星かと疑はれ、叢に集つては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。(口)

次の文に於ける助動詞の接續の誤を正せ。

- 1 此の品に手を觸るゝべからず。
- 2 此の處に塵芥を捨てべからず。
- 3 人の好意を無にするべからず。
- 4 彼は、毎夜深更まで勉強するらし。
- 5 無用の事には、關係せまじきものなり。
- 6 不都合の事なきやう、こゝろえべし。
- 7 去りたきものは去るべく、來たきものは來るべし。
- 8 今日、雨も降るまい、風も吹かまい。(口)
- 9 富士山巔の雪は、夏も絶えまじ。



10 明日は早立なれば、今宵は早く寝べし。

第七章 動詞と助動詞との接続 その四

動詞の連體形に續く助動詞

動詞の連體形に續く助動詞

(い)なり(定指) ごとし は總べての動詞の連體形に續き、まじ

らむ らし べし べかり めり は、ら行變格の動詞に限つてその連體形に續く。

四…… 咲く  
な變…… 死ぬる  
ら變…… 有る  
か變…… 來る  
さ變…… 爲る

深山の奥の花も咲くなり。  
なり 運動も勉強もするなり。  
朝は、五時に起くるなり。

上二…… 起くる

下二…… 捨つる

上一…… 見る

下一…… 蹴る

魚の水有るごとし。  
敝履を捨つるごとし。

その様、目に見るごとし。

まじ さる事は、あるまじ。

らむ 如何なる理にかあるらむ。

らし 焼死せるものもあるらし。

べし 泣く者もあるべし。

べかり さもあるべかりき。

めり 寂しくもあるめり。

ら變…… 有る\*

※ ごとし は、の を媒として名詞代名詞に續き、が を媒として

動詞形容詞の連體形に續く。

月光鏡のごとし。

落花蝶の舞ふがごとし。

才學君のごときは世に稀なり

環の端なきがごとし。

※詠歎のなりは、動詞の終止形に続き、指定のなりはその連體形に続く。

(ろ)口語のだ。です。は、助詞のを媒として動詞の連體形に続く。

四……	有る	咲く	言ひにくい事情が有るのだ。
か變……	來る		正直だから、店が繁昌するのだ。
さ變……	爲る		忙しいから、朝早く起きるのだ。
上……	起さる		蹴る
下……	捨てる		蹴る

※だらう。でせう。などにつゞくときは、のを省くことがある。

動詞の已然形に続く助動詞

動詞の已然形に続く助動詞

りは、四段活用動詞に限つて、その已然形に続く。

花、美しく咲けり。 家、大いに富めり。

※りが、さ行變格の動詞の未然形に続くことは、前にいつた通りである。

※りをな行變格 死ぬ の命令形 死ね に續けて 死ねり とすること、及びら行變格 居り 異なり の已然形 居れ 異なれに續けて、居れり 異なれり とすることは、中古文の法則ではないが、今は許容されてゐる。但し、同じな行變格ら行變格でも、往ねり 侍れり などいふことは、許容されぬ。又、流れり 蹴れり などのやうに、下二段下一段の活用などに續けることは、一切許容されぬ。

練習

次の文に助動詞の接續の誤があつたら、之を正せ。

- 1 敵艦、白旗を掲げり。
- 2 我が事、終れり。
- 3 目的は、已に遂げり。
- 4 刀を研げり。
- 5 年老いて、氣力大いに衰へり。

次の文に於ける助動詞の接續法を説明せよ。

- 1 男のすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。
- 2 日本武尊、駿河の賊を滅し給ひし後、相模の國より上總の國へ越えんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。
- 3 朝な／＼飯食ふごとくに忘れじな、恵まぬ民に恵まるゝ身を。
- 4 同じ路を引きかへすのは愚である。迷つた處で、今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることはあるまい。(口)
- 5 彼の立てた大きな功績は、千載の後に至るまで朽ちぬであらう。

(口)

- 6 過を改むるに、自ら過てりと思ひつかばそれにてよし。その事をば棄てて顧みず、直ちに一步踏出すべし。取締はんとて心配するは、詮なき事なり。

助動詞相互の接續

第八章 助動詞相互の接續

これまでは、主として一助動詞の動詞に續く場合について述べて來たが、實際はたゞ一助動詞が添つたばかりでは十分に自分の思想を盡し難い場合が多い。かやうな場合には、幾つかの助動詞を接續させて、思ふことを言ひあらはす。次の雙柱の例を見よ。

人はその放心を收めんこと肝要なるべし。

鼾聲雷の如く御熟睡あらせられたり。

枯木に雪の積つた景色は、時ならぬ花ざかりとも見えて、棄てられぬ趣がある。(口)

すべて助動詞は、たとひ數語連続しても、その固有の意味を失はぬものであるから、先づその一つ一つの意味を明かにし、さて後に全體の意味を考へ定めるがよい。

例へば前例の「肝要なるべし」は、名詞 肝要 に、指定助動詞の なる と推量助動詞の べし とを接続したもの、「御熟睡あらせられたり」は、名詞 御熟睡 動詞 あら に、尊敬助動詞 せ られ と完了助動詞 たり とを接続したもの、「時ならぬ」は、名詞 時 に、指定助動詞 なら と打消助動詞 ぬ とを接続したもの、「棄てられぬ」は、動詞 棄て に、可能助動詞 られ と打消助動詞 ぬ とを接続したものであることを知つて、さて全文の意味を明かに考へ定める類

である。

助動詞と助動詞とを接続する方法は、概ね動詞と助動詞とを接続する方法と同じである。

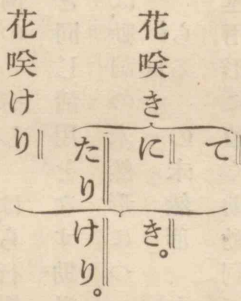
例へば前例の べし は、ら行變格動詞の連體形に續く助動詞であるから、又之と同じ活用をなす助動詞 なり の連體形 なる につゞき、ぬ は、動詞の未然形につゞく助動詞であるから、又助動詞 あり す なり らる の未然形 あら せ なら られ に續き、たり は動詞の連用形に續く助動詞であるから、又助動詞 らる の連用形 られ に續く類である。

助動詞は相互の連續によつて種々の意義を生ずるものであるが、是等は前に述べたやうに、その一語々々の意義さへ明かにすれば、實際の上に誤解を生ずることは稀であるから、こゝには之が説明を略し、たゞ時の助動詞を重ねて用ひる場合に生じる特

完了助動詞と  
過去助動詞と  
の重用

過去完了

殊の意義についてのみ、左にこれを説明しよう。  
完了助動詞と過去助動詞との重用　これは完了の助動詞 つ  
ぬ たり り の連用形なる て に たり り に過去の  
助動詞 けり 又は き を加へたもので、動作が已に過去の  
或時に完了した意を示す。之を過去完了といふ。

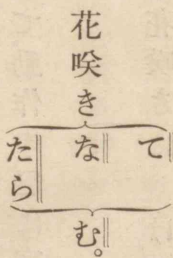


完了助動詞と  
未來助動詞と  
の重用

完了助動詞と未來助動詞との重用　これは完了の助動詞 つ  
ぬ たり の未然形 て な たら に、未來の助動詞 む  
を重ねたもので、動作が未來の或時に完了する意を示す。之を

未來完了

未來完了といふ。



※てむ は、完了の希望を示す意となる。それゆゑ、「疾く讀みてむ」といへば、「早く讀んでしまひたい」といふ意となる。  
以上述べた所によつて、時のあらはし方に左の六種の別のあることがわかる。但し實際に於ては、それほど嚴格なつかひわけはしない。



過去	見	咲
有	り	き
けり		

過去完了	見	咲
有	り	き
に	て	
たり		
けり		

未來	見	咲
有	ら	か
む		

未來完了	見	咲
有	ら	き
な	て	
たら		
む		

右の外、完了助動詞 つ、ぬ、たり、の連用形 て、に、たりに過去推量の助動詞 けむ を連ねたものがある。これは、過去の時に於て、動作の已に完了した意を推量していふのである。

花 咲き に て たり けむ

練習

次の文に於ける動詞・助動詞の接續を説明せよ。

- 1 さしのぼる朝日のごとくさわやかにたまほしきは心なりけり。
- 2 秋のはじめになりぬれば、ことしもなかばは過ぎにけり。
- 3 人々の夜更け待りぬべしといふに驚かされて急ぎ歸りにき。
- 4 急がずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。
- 5 此の兒文才あり。よろしく師をえらびて學ばしめらるべし。
- 6 潮みちぬ風も吹きぬべしとさわげば、舟に乗りなんとす。
- 7 學生たるものは、怠らず學業を勉強せざるべからず。某君の如き秀才も、若し學業を怠りたらんには、到底今日の如き成功を贏ち得ること能はざりしならん。
- 8 スタートが悪ければ、途中でどんなにこれを恢復しようとしても容易に先の人に追いつかれないだらうと思はれる。(口)

9 燈火の發明されなかつた太古の世には螢は随分廣く燈火の代用をつとめたものではありますまいか。(口)

10 明治天皇の御製を拜すれば王者の御風格が大御心を通して蒼穹にかゝる日輪のやうに一天四海に輝き渡らせられる。歌柄といふ點からいへばあらゆる古今の名歌人も天皇の御前に鞠躬如たらざるを得ない。(口)

第九章 用言と助詞との接續 その一

假定のばと確定のば 假定のば は動詞・形容詞・助動詞の未然形に添ひ、確定のば はその已然形に添ふ。而して此等は、何れもその條件の下に起る事實の順當なことをあらはす。

假定のば

風吹かば、波立たむ。

確定のば

天氣よくば、散歩せむ。  
知らずば、往きて問へ。

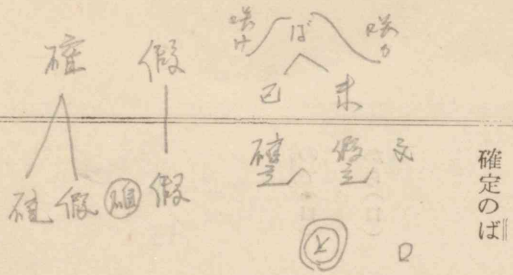
風吹けば、波立たむ。

天氣よければ、散歩せむ。

知らざれば、往きて問はむ。

※ 假定の條件に應ずる述語は、通例假定であるが、まゝ確定の述語を用ひることもある。

明日が日曜日ならば、明後日は月曜日なり。  
※ 命令の語は、假定の述語と見做す。



確定の條件に應ずる述語は、確定・假定の何れをも用ひる。  
 口語では、動詞・形容詞・助動詞の假定形に **ば** を添へて假定の  
 條件を示す。こゝが文語とは違ふ。

風が吹**け**ば、波が立**た**う。

天氣がよ**い**から、散**歩**し**よ**う。

知**ら**な**け**れば、往**つ**て問**へ**。

そして、確定の條件を示す場合には、**ば** の代りに **ので** 又

ので(口)  
から(口)

は **から** を用ひる。

風が吹**く**ので、波が立**つ**た**う**。

天氣がよ**い**から、散**歩**する**う**。  
し**よ**う。

知**ら**な**い**から、往**つ**て問**ふ**。  
問**は**う。

假定の**と**ともと確定の**ど**ども 假定の **と**とも は、動詞及び

動詞のやうに活用する助動詞の終止形、形容詞及び形容詞のや  
うに活用する助動詞の未然形に添ひ、確定の **ど**ども は動  
詞・形容詞・助動詞の已然形に添ふ。而して、此等は何れもその條  
件の下に起る事實の順當ならぬ意をあらはす。

假定の **と**とも

繪にか**く**と、筆も及**ば**じ。

乞**ふ**とも、與**へ**じ。

笑**は**るとも、忍**ば**む。

悲**し**くとも、泣**く**な。

とともどもども  
 ともどもども  
 ともどもども  
 ともどもども  
 ともどもども  
 ともどもども



確定のども

見たくとも、見るまじ。

確定のども

繪にかへども、筆も及ばず。

乞へども、與へず。

笑はるれども、忍ばむ。

悲しけれども、泣かず。

見たけれども、見ず。

※とも を動詞助動詞の連體形に添へて、「悔ゆるとも詮なからん」。

「問はるゝとも答ふまじ」のやうにいふことがある。中古文の法則

ではないが、今は許容されてゐる。

※とも を形容詞の終止形に添へて、「悲しとも泣くな」「暑しとも裸にならじ」など、條件の意味にいふのは誤である。

※とも の二語のかはりに、も を連體形に連ねて、如何なる理由あるも(ありとも)、返付せず。「雨は降りたるも(たれども)、風は吹かざりき」のやうに、今はいふことがある。しかし、誤解を生ずる恐のある場合には、用ひてはならぬ。例へば、

代價は安きも、我には不用なり。

の 安きも は、安けれども と 安くとも との兩義に解し得られるから、これを避ける類である。

ても(口)

とも は、口語では ても となる。ども は、口語も文語も同じである。

ても の例

乞<sup>○</sup>う<sup>○</sup>て<sup>○</sup>も<sup>○</sup>興<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>まい<sup>○</sup>。  
 笑<sup>○</sup>は<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>て<sup>○</sup>も<sup>○</sup>忍<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>う<sup>○</sup>。  
 悲<sup>○</sup>し<sup>○</sup>く<sup>○</sup>て<sup>○</sup>も<sup>○</sup>泣<sup>○</sup>く<sup>○</sup>な<sup>○</sup>。  
 見<sup>○</sup>た<sup>○</sup>く<sup>○</sup>て<sup>○</sup>も<sup>○</sup>見<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>。

ど ども の例

乞<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>興<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>まい<sup>○</sup>。  
 興<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>まい<sup>○</sup>。

笑<sup>○</sup>は<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>。  
 こ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>。

悲<sup>○</sup>し<sup>○</sup>い<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>泣<sup>○</sup>か<sup>○</sup>ぬ<sup>○</sup>。  
 泣<sup>○</sup>く<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>。

見<sup>○</sup>た<sup>○</sup>い<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>見<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>。  
 見<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>。

けれども(口)

乞<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ども<sup>○</sup>「笑はれるけれども」など動詞助動詞の下に添ふ  
 けれ は下の ど ども と合せて、 けれど けれども を一つ  
 の助詞と見做しておく。

練習

- 次の文に、中古文の法則に合はぬところ、又は誤つてゐるところがあつたら、それを改めよ。
- 1 松は千歳を経るとも、常磐の色をかへじ。
  - 2 明日雨天に候へば、延期致すべき筈に候。
  - 3 たとひ明日雨降れども、彼は歸國すべし。
  - 4 無事に暮し居り候はば、御安心下さるべく候。
  - 5 若し不行届の儀之あり候へども、御免下さるべく候。
  - 6 刀折れ矢盡くるとも、いかで届すべき。
  - 7 いかにか陳謝するとも、赦されず。
  - 8 都合あしとも、約束をば違へず。



つゝながら

この寒いのに、一着の綿入さへない。  
雨が降るのに、傘をささないで出て行つた。  
つゝながら つゝながら は、動詞助動詞の連用形に  
續いて、動作の同時に起ることを示し、で は、その未然形に續  
いて、その動作を打消して次の動作を言ふに用ひる。

濱邊の景色を見ながら歩む。

攻撃せしめながら前進す。

何事も爲さず、日を過す。

つゝ は、又動作の反復繼續を表すに用ひる。

日毎に詣でつゝ、そのかみをしのびけり。

深く兩親に愛せられつゝ、生ひ立ちけり。

ながら(口)  
ないで(口)  
ずに(口)

口語では、つゝ は、ながら となり、で は、ないで 又  
は ずに となる。

濱邊の景色を見ながらあるく。

攻撃させながら前へ進む。

何事も しないで、せずに 日を過す。

馬に蹴られないで、仕合であつた。

のみばかり まで のみ ばかり まで は、名詞・代名詞・副詞

等に添はるばかりでなく、又動詞・助動詞の連體形に添はる。そ

して のみ ばかり は、それと限る意を示し、まで は、その

到達する點を示す。

毎日唯一碗の粥をすゝるのみなり。

のみ  
ばかり  
まで  
づに

のみ  
ばかり  
まで

たゞ思ふ所を述べしばかりぞ。

さゞれ石の巖となりて苔のむすまで。

口語では、のみも亦ばかりとなる。

毎日唯一碗の粥をすゝるばかりです。

たゞ思ふことをいつたばかりだ。

※まで は、口語も文語も同じである。

な

禁止のな

禁止のな は、ら行變格の動詞の連體形、その他の

動詞の終止形、受身使役等の助動詞の終止形に添ふ。

長く權勢の地位に在るな。

すまじきことをすな。

人に輕んぜらるな。

生水を飲ますな。

御身はさる危険に近づかるな。

※こゝに塵をすつるな。などいふのは、誤である。

なほ左の表によつて、そのつゞき方を心得よ。

有るな

泣く 死ぬ 來 爲す 起く 捨つ 見る 蹴る

奪はる 蹴らる 奪はす 見しむ

「塵をすつるなかれ。」よそみをするなかれ。などの なかれ は前  
の な のやうに禁止の意を示すけれど、これは なくあれ の約

まつたもので、禁止の な とは全く品詞がちがふ。

な は、口語でも用ひる。但し、泣くな 死ぬな くるな するな 起きるな 捨てるな 奪はれるな 蹴させるな のやうに、口語では、すべて終止形に添ふ。

禁止のな…そ

「な…そ」は、通例その中間に動詞の連用形を

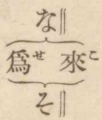
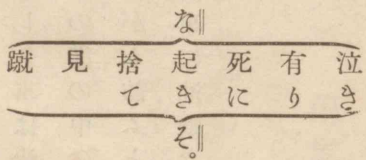
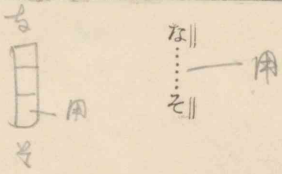
挿む。但し、か行さ行兩變格の動詞に限つて、その未然形を挿む。これも亦一種の助詞と見做してよい。

な泣きそ な笑ひそ

遊びになこそ

悪口なせそ

なほ左の表によつて、その續き方を心得よ。



な…その間に助動詞の添はつた動詞を挿むときにも、亦前の法則を適用する。

な泣かしめそ

な行かせたまひそ

な來させそ

練習

次の文に於ける用言と助詞との接續を説明せよ。

- 1 吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻かな。
- 2 泰時運盡きたらば、鐵の築地を築くとも助かり給はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候べし。

次の文に誤があつたら、これを正せ。

- 1 秋茄子嫁にくはせな。(諺)
- 2 けふは來るな、明日來い。(口)
- 3 女々しい事をして人に笑はれな。(口)
- 4 悪しき事は決してするな。
- 5 この溝の中に塵を捨つるな。
- 6 友がり訪ふとも、な長居せ給ひそ。
- 7 萬事に油斷なせそ。

並列のと  
体

指定のと  
體令

第十一章 用言と助詞との接續 その三

**並列のと** 並列の と は、もと、名詞に添ふ助詞であるけれども、又動詞・助動詞・形容詞の連體形にも添ふことがある。これは、その連體形の下にあるべき名詞を略したのである。

見ると聞くとは大ちがひなり。  
人に知らるゝと知られざるとは、固より問ふところにあらず。

彼は、學識の博きと徳望の高きを以て推さる。

**指定のと** 指定の と も、亦並列の と のやうに、名詞に添ふ助詞であるけれど、又動詞・助動詞・形容詞に添ふことがある。但し、この場合には、終止形でも、連體形でも、已然形でも、命令形で、

も、すべて文句の切れるところに添ふ。これは、とから上の句を一體言と見做したのである。

一 終止形に添ふ例

善に善報あり。と古人もいへり。

花咲きぬ。と告げ越す。

物言へば唇寒し。といふ語あり。

二 連體形に添ふ例

人やある。と問ふ。

花なむ咲きぬ。ると告げ越す。

春や疾き、花や遅き。と聞きわかん。

三 已然形に添ふ例

我が校の名を揚ぐるは君にこそあれ。とことほぐ。

花こそ咲きぬ。れ。と告げ越す。

祝ふ今日こそ樂しけれ。と生徒唱ふ。

四 命令形に添ふ例

急がばまはれ。といふ諺あり。

とく歸りね。と促したまふ。

練習

次の文に於ける用言と助詞との接續を説明せよ。

1 若し假初にも、その偉なるもの、高さものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書を用極れるに近しと謂ふべし。

2 世の人、大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は、創業撥亂の時なりき。これより後の十年こそは、内治を整理し、民利を進むる時なれとて、將來の



爲に大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とはな  
りぬとのたまへり。

次の文のとの用法と接續とを説明せよ。

- 1 寢よとの鐘の音、枕にひびく。
- 2 これをこそ獨を慎むとはいふなれ。
- 3 取ると取らざるとは、汝にまかす。
- 4 時は金なりと古人もいへり。
- 5 古語に曰く、妖は徳に勝たずと。
- 6 歌を詠むと詩を作ると、いづれか難き。
- 7 青年、國を出でて都へと志す。
- 8 恐しとも思はず。
- 9 寂しくとも、こらへん。
- 10 今日來ずば明日は雪とどふりなまし、消えずはありとも花と見  
ましや。

第十二章 用言と助詞との接續その四

疑問のやか

ヲ ヤ  
体 終

疑を体  
終を体  
終を体

疑問のやか やは、動詞助動詞・形容詞の終止形に添ひ、

かはその連體形に添ふ。

- 有りや、無しや。
- 有りきや、無かりきや。
- 有るか、無きか。
- 有りしか、無かりしか。

※ 中古文の法則は前述の通りであるけれど、現今は往々、「あるや、無き  
や」、「有りしや、なかりしや」のやうに、やを連體形に添へて用ひ  
る。  
※ やか は、共に疑問の助詞であるが、誰 何 いづれ のやうな

疑の語が上にあるときは、やを用ひないで かを用ひるのが  
中古文の法則である。

汝は何事を思ふか。 今日は何日なるか。

春と秋といづれがよきか。

但し現今は、「何事を思ふや」、「幾日なりや」、「いづれがよきや」のや  
うにかやうな場合にも、やを用ひるものがある。

口語では、疑問を示すに、かを用ひて やを用ひない。且  
必ず之を文の終に添へる。

明日は、日曜か。

君の讀んで居る本は、何ですか。

あの方を御存じていらつしやいますか。

やは、又、疑問の意から轉じて反語となる。

豈悲しむに足らんや。

反語のやか

やは  
かは

誰か烏の雌雄を知らん。

やか に感動詞の は を加へた やは かは も亦反語とな  
る。

月やはものを思はする。

いかで悲しみ歎くべきかは。

練習

次の文に中古文の法則に違つたところや、誤つたところが  
あつたら、それを指摘せよ。

- 1 汝は如何に感ぜしや。
- 2 嗚呼また何をやいはん。
- 3 果して然るや否やを知らず。
- 4 富士山と新高山と、いづれが高しや。
- 5 此の樹木のこの地に適するや否やは疑はし。
- 6 此の事は如何に處理して可なるべきや。

7 たとひ人には知られざるも、心に恥ぢざるべきや。  
8 君は此の間に答へ得るや、得ずや。

第十三章 誤り易い品詞

誤り易い品詞

同形異義の助動詞たる指定の なり と詠歎の なり、指定の たり と完了の たり、過去の けり と詠歎の けり、打消の ぬ と完了の ぬ、ね は、とかく誤り易いものであるが、その區別並に接續の規則は、已に前章に述べておいた。此等の助動詞の外にも、尙その形が同じで、その意味のちがふ助動詞・助詞・感動詞等がある。今その識別法を述べよう。

一 な の 識別

な には、(一)完了の助動詞 ぬ の未然形なる な と、(二)禁止の助詞の な と、(三)感動詞の な とある。(一)は動詞

な の 識別

助動詞の連用形から受け、(二)は動詞・助動詞の終止形から受け、(三)は動詞・助動詞・形容詞の終止形から受ける。

- 一 雨霽れなば、郊外に散歩せむ。
- 二 この堤の上に登るな。
- 三 花の色は、うつりにけりな。

二 なむ の 識別

なむ には、(一)未來完了の助動詞の なむ と、(二)特に指示する助詞の なむ と、(三)願望を示す助詞の なむ とある。(一)は完了助動詞 ぬ の未然形の な に未來の む を加へたもので、動詞の連用形から受ける。(二)は用言・助動詞の連體形・體言助詞等から受け、下を用言・助動詞の連體形で結ぶ。(三)は動詞・助動詞の未然形から受く。

なむ の 識別

にの識別

一 散りなむ後ぞこひしかるべき。  
 二 花の散るなむ惜しき。  
 三 稻葉の上はよきて吹かなむ。

※此等の なむ は、通例、皆發音のまゝに なん と書く。

三 への識別

に には、(一)完了の助動詞 ぬ の連用形なる に と、(二)時處を示す助動詞の に と、(三)反對を示す助動詞の に とある。(一)は、動詞助動詞の連用形から受け、(二)は、體言又は用言助動詞の連體形から受け、(三)は、用言助動詞の連體形から受ける。

一 またこそ參り候はめとて、歸りにけり。  
 二 うれしきにも、かなしきにも、思ひ出づ。  
 三 夜の明けたるに、何とて起き出でざる。

しの識別

※右の外、「雨ふりにふる」「風吹きに吹く」のやうに、同一動詞の間に挟まり、その連用形に續いて、その意味を強める助動詞の し もある。

四 しの識別

し には、(一)過去の助動詞 き の連體形なる し と、(二)強めの助詞の し とある。(一)は、か行變格の未然連用二形、さ行變格の未然形、その他の動詞の連用形から受け、(二)は、種々の語から受ける。

- 一 來し方行く末の事もおもひやらる。  
 烈しと聞きし嵐の音も、夜半の夢となりぬ。
  - 二 頃しも彌生半ばの空なりき。  
 さる事なきにしもあらず。
- 搜索せしが、見當らざりき。

ばやの識別

五 ばやの識別

ばやには (一) 確定の助詞 ばに疑問の助詞 やを添へた  
 ばやと、 (二) 假定の助詞 ばに疑問の助詞 やを添へた  
 ばやと、 (三) 願望の助詞の ばやとある。 (一) は、動詞・助動詞  
 の已然形から受け、 (二) (三) は、共にその未然形から受ける。

一 紅葉すればや照りまさるらん。

二 心あてに折らばや折らん。

三 時鳥まだしきほどの聲を聞かばや。

六 はがをもやかの識別

これに (一) 助詞のと、 (二) 感動詞のとある。

は

一 花は櫻木、人は武士。(指示)

二 それ見よ、まことにておはしたるは。(詠歎)

はがをも  
やかの識別

が

一 わが日の本。(所有)  
一 鳥が鳴く東の國。(事主)

心のかぎりにつとめけるが、つひに失敗に終りぬ。(反對)

二 そのことも知らぬ旅寝してしが。(願望)

感動詞の が は、 がな と同じやうに、願望の意を示す。

を

一 身を立て、道を行ふ。(目的)

二 山に登り、谷を渡る。(場所)

雨の降れるを、傘さして出て行きぬ。(反對)

八重垣つくる、その八重垣を。(詠歎)

ぬれてを行かむ、小夜はふくとも。(詠歎)

學も博く、徳も高し。(一致)

一 風はいかに強きも、農作を害するに至らじ。(不順當)  
昨日彼を訪ひたるも、不在なりき。(不順當)

二 あはれ悲しも。(詠歎)  
三 必ずしも然らず。(詠歎)

や  
一 わが思ふ人はありや、なしや。(疑問)  
二 松島や、あゝ松島や、松島や。(詠歎)

か  
一 霞か、雲か、はた雪か。(疑問)  
二 くるしくも降り來る雨か。(詠歎)

※感動詞の か は かな と同じやうに、詠歎をあらはす。

練習

次の文の雙柱を施した語の異同を説け。

1 死にし兒顔よかりき。  
露と消えにし命かな。

2 祈らずとても神や守らむ。  
今を春べと咲くや、この花。

遊びに行きなむ。  
3 遊びに行かなむ。  
遊びになむ行く。

何くれといどむ体ことに勝ちたるぞ、うれしきや。  
4 かくいたづらに老い果てんとは、思ひかけきや。  
知らず、さるためしいにしへにありや、否やを。

5 知らぬ事は、知らずと答へよ。  
櫻の花、咲きぬらし。

6 行けかしな。  
悪口すな。

悪口なせそ。

花咲きなば、見にゆかむ。

花は、咲きたりや。

7 珍らしや、此の花。

心あらん人に見せばや。

とく行かばや、間にあはん。

急ぎしが、及ばざりき。

家の風をも吹かせてしがな。

8 昨日こそ早苗とりしか。

召されしかば、参りき。

何事もなかりしか。

今宵の宿へと、急ぎに急ぐ。

9 天に日月あり、地に山川あり。

去年の今夜は、清涼に侍りにき。

10 人々の守り居るに、猫は魚をくはへ去りぬ。

學を修め、業を習ふ。

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを、雲のいづこに月やどるらん。

秋の田のかりほの廬の苫をあらみ、我がころもでは露にぬれつ。

つ。

知るも知らぬも逢坂の關。

11 ものをいふも、くゞりも聲にひびきて聞えず。

こぎ出でし船の行くへ知らずも。

### 第十四章 品詞の解剖

文をそれ／＼の品詞に分解することを品詞の解剖といふ。品詞の解剖には、例一のやうに、單に品詞の九種を分けるものと、例二・三のやうに、更に之を小別するものとある。

品詞の解剖

一嵐山 名、固 は 助 花 名、普 に 助 宜しく、形 又 接 紅葉 名、普 に 助 宜し。形  
 二雲 名、普 に 助 聳ゆる 動、自、下二、連體 高千穂 名、固 の 助 高嶺 熟名、普 おろし 形、一、語幹名 に 助 草 名、普  
 も 助 木 名 も 助 なびきふし 熟動、三四、自、連用 けん 助、自、か四、動、自、三四、連用 大御代 名、普 を 助

あふぐ 動、他、が四、連體 今日 名、普 これ 助 樂しけれ。形、二、已然

三日本人 名、普 の 助 性質 名、普 は 助 櫻 名、普 の 助 花 名、普 に 助 よく 副  
動、自、な上、一、連用 似 助 て 助 居る 助 の 助 で 助 は 助 なから 熟動、自、ら四、未然  
助動、推量、連體 う 助 か 助 形、一、連用、動、自、ら四、未然

※ 名詞は普通名詞、固有名詞及び數詞に分けよ。  
 ※ 代名詞の種類及び稱は、それ／＼に分けよ。  
 ※ 動詞は自他活用及び活用形を、形容詞は活用及び活用形を、助動詞は種類及び活用形を、それ／＼に分けよ。

※ 疊語又は熟語の名詞・代名詞・動詞・副詞・接續詞・感動詞等は、それ／＼その成分に分けよ。

※ 接頭語及び接尾語を有する語も、亦これを記しわけよ。

練習

次の文を品詞に解剖せよ。

- 1 月色銀の如し。この良夜を如何にせん。
- 2 道すがら四方の梢の色々なるを御覽じ過させ給ふほどに、長き日もやう／＼に暮れかゝりぬ。
- 3 月は雲にかくれても、また照る時もあるものを。あゝかなしいかな。
- 4 世界は一大書冊なり。而して家を出でざるものは、わづかにその一頁を讀めるのみ。
- 5 我を知りにし太閤の世になき後は、誰が爲に千里の外に戈執りて、異境の山にいくさせん。



- 6 美しい花を咲かせる爲には、よく根を培はなくてはならない。(口)
- 7 峠三里ののぼりあり、やつこらやつと來は來たが、目ざした町のともじ火が見えないうちに日が暮れた。(口)

次の文を詳しく解剖せよ。

- 1 あさがほにつるべとられてもらひ水。
- 2 足の痛みは異ならねど、頭の重さはやゝ薄らぎたり。
- 3 潮満ちぬ、風も吹きぬべしとさわげば、舟に乗りなんとす。
- 4 春雨のふるはなみだかさくら花、散るを惜まぬ人しなれば。
- 5 湯本といふ處に泊りたるに、嵐烈しくおとづれ、谷川高くむせびて、夜半の夢しばく破れぬ。
- 6 「事のたとへの候ぞかし、故郷へは錦を着て歸ると申すこと、の候へば、なにか苦しい候べき、錦の直垂を御免候へかし」と申しければ、大臣殿、やさしうも申したりけるものかな」とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。

将握 ↓ 端緒  
 懐懐 ↓ ぶさ  
 記帳  
 高志高層  
 申す、心通、不、心

文の成分

文を組立てるものは何れも語であるけれども、その職分の上から見ると、自ら數種に分れる。之を文の成分といふ。

第十五章 文の成分

- 7 田樂の木の芽にはらもはるの野や、霞のおびをゆるめてぞ喰ふ。
- 8 折柄森の時を離れた鳥が一羽、朝日を負うてさながら曉を告げ渡る神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて、河向ふの方へ飛んで行つた。(口)
- 9 はつ。兄上はお討たれなされたか。この上は祖父様を自滅させ、敵工藤を最負せられた將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。(口)
- 10 私は始めて明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに、其の莊嚴な、静寂な光景を見て、強い感激に打たれずにはゐられなかつた。(口)

主語  
述語

**主語 述語** 主語とは、文の題目となる語、即ち説明せられる語をいひ、述語とは、主語なる事物について述べる語をいふ。

鳥鳴く。 花散る。 これはよし。 かれはあし。

前例の 鳥 花 これは かれは は主語、 鳴く 散る よし あし は述語である。

主語・述語の  
構造

主語は、多くは名詞・代名詞を用ひ、述語は、重に動詞・形容詞を用ひる。但し、名詞・代名詞に助詞を添へ、動詞・形容詞に助動詞・助詞等を添へることのあるのは勿論である。

春雨<sup>主</sup>降りやまず。 夏<sup>主</sup>は來<sup>述</sup>にけり。

それこそよからめ。

※助詞 か ぞ で終るものは、助動詞 なる を省略したものと見てよ。

客語

**客語** 客語とは、他動詞を説明語としてゐる文に於て、その目的を示す語をいふ。

農夫、稻を刈る。 余は、山を愛す。

右の文の 農夫 余は は主語、 刈る 愛す は説明語であるけれど、この 刈る 愛す は他動詞であるから、單に「農夫刈る。」余は愛す。」といったばかりでは、その文意が明かでない。その動作の目的物たる 稻を 山を を加へて、その意味が始めて全くなる。此の目的物たる 稻を 山を は、即ち此の文に於ける客語である。

※客語は、名詞又は代名詞から成り、通例 を といふ助動詞を伴ふ。但しまゝ、を の省かれたものもある。

客語の構造

補語

茶は飲まず、水のみ飲む。

補語とは、主語・述語・客語以外に於て、文意を全うする上に必要な語をいふ。

秀吉、關白となる。 子が、親に似る。(口)

右の例に於て、秀吉 子が は主語、なる 似る は自動詞の述語であるけれど、「秀吉なる」「子が似る」といつたばかりでは、その意味が明白でない。更に 關白と 親に などいふ語を加へる必要がある。而して、關白と 親に は他動詞の目的を示す語ではない、従つて客語ではなくて補語である。又、艱難、汝を玉にす。

落武者が、芒を敵とおもふ。(口)

の文に於て、艱難 落武者が は主語、す おもふ は述語、

汝を 芒を は客語であるけれど、「艱難、汝をす」「落武者が、芒をおもふ」といつたばかりでは、その意味がまだ明白でない。更に 玉に 敵と などいふ語を加へる必要がある。而して、玉に 敵と は他動詞 す おもふ の目的物ではない、随つて客語ではなくて、補語である。

補語は通例、名詞・代名詞から成り、前例の に と の外に、なほ、の をして より 等の助詞がつくこともある。

光陰は、矢のごとし。

壯烈鬼神を泣かしむ。

隊長部下をして殘敵を討伐せしむ。

優等生、學校より賞品を受く。

形容詞を述語とした文にも、亦補語を要するものがある。左の文の乙に 白絲と は、即ち補語である。

補語の構造

修飾語

甲は、乙に等し。 心は、白絲と同じ。  
※指定の助動詞 なり たり 及び助詞 ぞ か などの説明語となつた文は、上に名詞・代名詞を加へねばならぬ。而して、この加へられた名詞・代名詞は、何れも補語である。

秀吉は英雄なり。 汝は汝たり。  
今日は何日なるか。 汝は誰なるぞ。

修飾語

主語・述語・客語・補語の外、なほ、文の組立に用ひられる一種の語がある。主として文の意味をくはしくする爲に用ひる之を修飾語といふ。

白き鳥、飛ぶ。 雨、甚だ強し。  
春風、櫻の花を散らす。 父、財産を小さき子に譲る。  
右の例に於て 白き は、主語 鳥 に對し、甚だ は、述語 強し に對し、櫻の は、客語 花 に對し、小さき は、補語

修飾語の構造

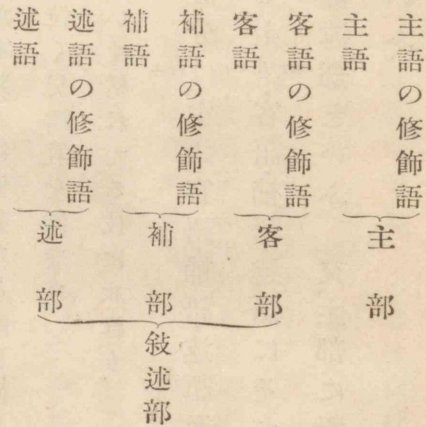
子に對して、それ／＼その語の意味をくはしくしてゐる。此等は、何れも修飾語である。

主語・客語・補語の修飾語は、形容詞・動詞の連體形か、動詞・名詞に添うた助動詞の連體形か、又は助詞の が を伴つた名詞・代名詞かなどである。述語の修飾語は、主として副詞である。なほ次の例を見よ。

わが軍、頻りに優勢なる敵を破る。  
母、泣く兒に乳を飲ます。  
鳥、いま枯れたる枝に止れり。

文の成分は、主語・客語・補語・述語及びそれ／＼の修飾語である。而して主語・客語・補語・述語にそれ／＼の修飾語を加へて、主部・客部・補部・述部といふ。又、主部に對して、他の三部を總稱して敘述部といふ。

主部  
客部  
補部  
述部  
敘述部



練習

次の文を各成分に分解せよ。

- 1 鯨は哺乳獸なり。
- 2 余は明日君を訪はん。
- 3 父太郎をして次郎に書を教へしむ。
- 4 冬の夜の月は、此の上なく寒し。

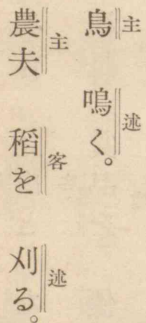
- 5 余は見すくよき機会を失へり。
- 6 活潑なる精神は、常に健康なる身體に宿る。
- 7 各級競走の勝利は、遂に四年級選手に歸せり。
- 8 日蓮上人は、各時代を通じて類稀なる豪傑なり。
- 9 燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん。
- 10 明治二十三年十月三十日、明治天皇は、忝くも教育勅語を我等國民に下し賜ひたり。

第十六章 文の成分の排列及び省略

文の成分の常  
の位置

常の位置

文の成分は、之を排列するにほゞ一定の順序がある。



文の成分の倒置

秀吉主 關白補 なる述。  
 校長主 賞品客を 優等生補に 與述ふ。  
 校長主 優等生補に 賞品客を 與述ふ。  
 雨主 甚だ述の修 強述し。  
 父主 鉦萬客の修の 財産客を その補の修 子補に 讓述る。  
 我が主の修 軍主 大いに述の修 敵兵客を 破述る。

前例によつて、成分排列の順序は左の如くなること分る。

一 主語は上。

二 述語は下。

三 客語補語はその中間。但し、補語は客語の下又は上。

四 修飾語は修飾される語の上。但し、述語の修飾語は、主語のすぐ下。

成分の倒置

しかし、語調を整へ、或は語勢を強めるなどの必要

から、わざと成分の位置を變へることがある。

一 主語と述語とを倒置したもの。

咲述け、花主よ。

大なる述かな、孝主の徳。

二 客語を首位に置いたもの。

巧言令色客の徒を 誰主かは 惡述まざらん。

そんな客事を あなた主は 誰補に お聞述きてした。(口)

三 補語を首位に置いたもの。

雲補のいづこに 月主 やど述るらむ。

親補の命令には、子主たる者は 従述はねばなりませぬ。(口)

四 客語と述語とを倒置したもの。

文の成分の省略

※ 詩歌には、成分の倒置されてゐるものが極めて多い。

祝へ、我が君を。  
訪へかし、人の花の盛りを。

成分の省略

文の成分は、それ／＼一定の職分があるから、濫に  
加除すべきものではないけれども、思想の明瞭と確實とを缺か  
ない限は、文を簡潔にし、語勢を強くするために、その中の或成分  
を省略することが出来る。

一 主語を省略したもの。

余は明日君を訪はん。

世人陰曆三月を彌生といふ。

※ 命令禁止の文には、主語の省略されたものが殊に多い。

汝等前へ進め。

(人々)こゝに馬を繋ぐべからず。

二 述語を省略したもの。

その理由はいかに。(あらむ)

千里の道も一歩より。(始る)

あなたはどちらへ。(いらつしやいますか)。(口)

はい。(私は)大阪まで。(まゐります)。(口)

三 客語を省略したもの

余は、すこしもそれを知らざりき。

余は、昨日彼を訪ひしが、今日も亦彼を訪へり。

四 補語を省略したもの

校長、優等生に褒状を與へ、併せてこれに賞品を授く。  
山田君も、もう選手を他の人に譲つた。(口)

練習

次の文の排列を常の順序に改め、且省略されてゐる語を補へ。

- 1 盛なるかな、我が皇の御威徳。
- 2 落書無用。
- 3 仰げば尊し、わが師の恩。
- 4 土足にて昇降すべからず。
- 5 たゆまず學べ、時の間も。
- 6 誰かいふ、狭くして且陋なりと。
- 7 やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。
- 8 いふことなかれ、今日學ばずとも明日ありと。
- 9 降る雪にきこりの路もうもれけり。
- 10 たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。
- 11 あんな人に、私もなつて見たい。(口)

- 12 たべてから出かけませう。やがて十二時ですからね。(口)
  - 13 もうお歸りですか。どうぞ御機嫌よう。(口)
  - 14 おとうさんはどこへ。停車場へ。何しに。お見送りに。(口)
  - 15 今日有益な講話を私はうかひました。(口)
  - 16 一茶有り難く頂戴仕ります。ではこれで御暇を。加賀侯、左様か。太儀であつたの。(口)
  - 17 「おや、良寛様が」といふと、あわてて、静かにしろ、静かにしろ。子供が見つける。(口)
  - 18 愉快だつたね、本當に、昨日の遠足は。(口)
  - 19 花さそふ比良の山風吹きにけり、こぎゆく船のあと見ゆるまで。
  - 20 あがるや信號。「皇國の興廢この一舉。務めよ各員。將卒共に肉こそ躍れ。艦内更に一語を聞かず。」
- 次の文に於て差支のないかぎり成分を省略せよ。
- 1 中江藤樹は俗名をば與右衛門といひ、近江の人なり。その徳行



世にたぐひ稀なりければ、世人この人を呼びて近江聖人といへり。

2 花をちらす風のやどりをばたれか知る。若しこれを知る人あらば、願はくはわれに教へよ。われ、そのやどりにゆきて、風にうらみむ。(これを三十一音の短歌に約めよ)

### 第十七章 節

「花散る。」「蝶舞ふ。」「寒さ厳し。」「雪降る。」「忠義の心が深い。」「満は損を招く。」「謙は益を受く。」などは、いづれも主語・客語・述語等から成る完全な文である。けれども、

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。

寒さの厳しき地、必ずしも雪多からず。

節

名詞節

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。  
日本人は、忠義の心がふかい。(口)  
満は損を招き、謙は益を受く。  
のやうに用ひられたときは、大きな文の一部分となつてゐる。かやうに、文が他の文の一部分となつたものを節といふ。節は之を大別して左の五種とする。

名詞節

名詞節とは、文中にあつて名詞の用をなす節をいふ。

次の「花の散る」(主語の用をなす)、「蝶の舞ふ」(補語の用をなす)、「人の己を知らざる」(客語の用をなす)などは、即ち是である。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。

君子は、人の己を知らざるを憂へず。

形容節

形容節とは、文中にあつて他の名詞を修飾する用をな

形容節

す節をいふ。次の「月の明かなる」(主語夜を修飾す)。「八重葎しげれる」(補語野邊を修飾す)。「徳高き」(客語人を修飾す)などは、即ち是である。

月の明かなる夜は少し。

都大路は、八重葎しげれる野邊となりぬ。

誰か徳高き人を仰ぎ慕はざらん。

副詞節

副詞節とは、文中にあつて述語を修飾する用をなす節

をいふ。

次の「雪降れば」「徳高けれど」などは、即ち是である。

雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。

彼は徳高けれど、學識に乏し。

述語節

述語節とは、文中にあつて述語の用をなす節をいふ。

次の「忠義の心が深い」「波靜かなり」などは即ち是である。

日本人は、忠義の心が深い。(口)

瀬戸内海は、波靜かなり。

※かやうな場合には、述語節中の主語「忠義の心が」を小主語と

いひ、日本人は「瀬戸内海は」を總主語といふ。

對立節

對立節とは、文中の各節が互に相對立して、全く同等の價值を有するものをいふ。次の各節などは、即ち是である。

鳥歌ひ、蝶舞ふ。

富は屋を潤し、徳は身を潤す。

雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。

月落ち、鳥啼きて、霜天に滿つ。

※この對立節に對して、前の各節を附屬節と總稱することがある。

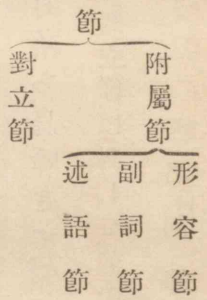
一名詞節

附屬節

小主語

總主語

對立節



練習

次の文から節を選び出し、且その種類を示せ。

- 1 天高く、氣清し。
- 2 前車の覆るは、後車の戒なり。
- 3 水清ければ、大魚なし。
- 4 子曰く、剛毅木訥は仁に近しと。
- 5 仁者は、いのちながし。
- 6 君の説は是ならば、僕の説は非ならん。
- 7 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
- 8 雁は花咲く春を見すて北地に歸りぬ。

文の構造上の分類

第十八章 文の構造上の分類

文はその構造の上から單文、複文、重文の三種に分ける。

- 9 三人集れば文殊の智慧。
- 10 天は空しくして鳥の飛ぶに任せ、海は濶くして魚の躍るに従ふ。
- 11 動物の中で猿ほど人に似てゐるものはない。(口)
- 12 爲朝矢二つ三つ放さば、夜の明けざるうちに勝負は決すべし。
- 13 誰か光陰の疾く過ぐるを惜まざらん。
- 14 紫苑も咲いてゐれば、女郎花も咲いてゐる。(口)
- 15 思想は財布と反對で、外へ出せば出すほど豊富になる。(口)
- 16 「あ」と聲を掛けたが、返事がない。(口)
- 17 竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢は散らばつてゐる、線香は呑氣に燻つてゐる。(口)

單文

單文

節を含まぬ文をいふ。

日暮る。

秋風衣を撲つ。

鳥籠の中に在り。

父、財産を子に譲る。

わが海軍、大いに露國の艦隊を日本海に破る。

※主語客語補語述語又は修飾語が二つ以上ある文でも、節を含まないかざりは皆單文である。

屋根も、<sup>主</sup>庇も、<sup>主</sup>手水鉢も、<sup>主</sup>處として落葉ならざるはなし。

菅公は、<sup>客</sup>才と學と徳とを兼ね備へたり。

私は幼い時、<sup>補</sup>父にも母にも兄弟にも死に別れました。(口)

家新しく<sup>述</sup>て廣し。

我が日本人は、<sup>修</sup>清く、<sup>修</sup>直く、<sup>修</sup>明き心を持ってり。

※「仁者は命長し。」「日本人は忠義の心が深い。」などは、節を含んでゐるけれど、この「命長し。」「忠義の心が深い。」は、總主語たる「仁者は」日本人は」に對すれば、單純な述語の用を爲すに過ぎぬ。故に、述語節を含む文は、なほ之を單文の内に加へる。

複文

複文

名詞節・形容節・副詞節を含んでゐる文をいふ。

花の散るは蝶の舞ふに似たり。<sup>名詞節</sup>

都大路も、八重葎しげれる野邊となりぬ。<sup>形容節</sup>

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。<sup>副詞節</sup>

重文

二つ以上の對立節から成る文をいふ。

君は遠く去り、僕は永く留まる。

平氏は壇の浦に亡び、源氏は鎌倉に興れり。

重文

吉野山は花に宜しく、龍田川は紅葉に宜し。  
 月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。  
 文は單文・複文・重文の三種に外ならぬけれど、時としては頗る複  
 雜なものがある。今、二三の例を左に示さう。

一 慾深き人はその心常に貧しく、  
形容節 (複文) 對立節 述語節

慾なき人はその心常に富めり。  
形容節 (複文) 對立節 述語節 (複文二つか  
 ら成る重文)

二 山は裂け海はあせなん世なりとも、  
重文 (形容節) 對立節

君に二心(わが)あらめやも。  
(述語節) (重文を含  
 む複文)

三 土裂けて水涌き上り。  
副詞節 複文 (對立節) 述語節

巖われて谷にまろび入り、  
單文 (對立節)

渚こぐ舟は波に漂ひ、  
單文 (對立節)

道行く駒は足の立ちどをまどはせり。  
單文 (對立節) (複文一つと單文三  
 つとから成る重文)

四 箱根は土地も高く温泉もあつて、大層氣持のよい處で  
對立節 形容節  
 あります。(重文から成る副詞節及  
 び形容節を含む複文)

練習

次の文の構造上の種類を分ち、且文中に含まれてゐる節を  
 分類せよ。

- 1 彼は、柔道と野球とに長ぜり。
- 2 雪は野山をうづむとも、老いたる馬ぞ道は知る。
- 3 諺に、健全なる身體に健全なる精神宿るといへり。

- 4 雨降つて地固まる。
- 5 勅なれば髪はきりもし剃りもせん、清き心は神ぞ知るらん。
- 6 山寺の鐘遠く聞えて、秋の日は山の端に入りぬ。
- 7 人多き部屋は、空氣の汚れ易きものなり。
- 8 十五夜の月皎々として清き光を放ちぬ。
- 9 衣は肝に至り、袖は腕に至る。
- 10 雨風烈しく、道暗くして、敵の鬨の聲此處彼處に聞ゆ。
- 11 氣霽れては、風新柳の髪を梳り、氷消えては、浪舊苔の鬚を洗ふ。
- 12 古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。
- 13 霜月の長夜を寒み鷗鳴く、一羽が鳴けばまた一羽鳴く。
- 14 春が深くなると共に、麥が伸びる、桑が芽を吹く。(口)
- 15 木の葉が落ち盡せば、數十里四方に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。(口)

文の性質上の分類

敘述文

### 第十九章 文の性質上の分類

文は又その性質上から**敘述文**・**疑問文**・**命令文**・**感歎文**の四種に分けることが出来る。

**敘述文** 事實をありのままに敘述する文で、文の最も普通な形である。この種の文には、**肯定**を示すもの、**否定**を示すもの、**推量**を示すものなど色々ある。

時は金なり。(肯定)

風吹けば海荒る。(肯定)

昨日の講演會は面白かりき。(肯定)

月は發光體にあらず。(否定)

春は來れども、花咲かず。(否定)

疑問文

風吹かば、海上荒れん。(推量)  
 都合悪しくとも、約束をば違へじ。(推量否定)  
 兩三日の中に花咲かん。(推量)  
 明日は、風雨の虞あるまじ。(推量否定)

疑問文

自ら疑ひ、又は人に問ふ意を示す文をいふ。  
 我が思ふ人は、ありや、なしや。  
 榮枯は夢か、幻か。  
 かしこに立てる人は、誰ぞ。  
 夜や深き、道や迷へる。  
 桃と櫻と、いづれか美しき。

※前例のやうに、疑問文には、多く「や」「か」又は「ぞ」を添へる。但し、上に「何處」「何れ」など疑の語があるときは、「や」「か」を省い

てもよい。

雲の何處に月宿るらん。

何れを花とわきて折らまし。

※反語の文は、形は疑問で、その意は斷定である。今は暫くその形の上から之を疑問文の中に加へる。

豈それ然らんや。

いかでさることのあるべき。

また來ん春のなからんやは。

ふたゝびとだにくべき春かは。

いかんぞ之を知らん。

命令文

命令文

要求を言ひ表す文をいふ。この種の文には、「かくせよ。」と正面から命令するものと、「しかするなかれ。」と反面から命令(即ち禁止)するものとある。

感歎文

感歎文

朝は、早く起きよ。  
 下女に庭を掃かしめよ。  
 兄弟姉妹は仲むつまじかれ。  
 よく學び、よく遊ぶべし。  
 光陰を徒費することなかれ。  
 堤上の樹木を折るべからず。  
 あるじなしとて春を忘るな。  
 益なきことな思ひそ。  
 強い感動を表す文をいふ。  
 嗚呼、天道の無情、一に何ぞこゝに至るや。  
 あはれ、ことしも暮れぬ。  
 やあ、よくやつて来てくれたな。(口)

感歎文は通例 あな あはれ やあ かな や よ な などの感動詞を含む。

感動詞の中、いざいで のやうに單に發語の意を示すもの、若しくは、かし のやうに單に念を推し意を強めるに用ひるものなどを含んでゐるだけの文は、普通の敘述文又は命令文であつて、感歎文ではない。

かやうに、文はその性質の上から四種に分類するけれども、實際は、一文中に二種以上を含有する場合が多い。

練習

次の文を性質の上から分類せよ。

- 1 あつばれの馬や、名馬や、何者の馬ぞと、褒めたまふこと大方ならず。
- 2 君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの、



故なきにあらず。嗚呼、君の心事まことに悲しからずや。然れども、事既にこゝに至る。これをいふも何の益かあらん。

3「あな、あさまし。人もこそ聞け。いかに和上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とく／＼入らせたまへ。」

4 美なるかな、佐渡が島の風景。凡そ眺めてかくも懐かしく、又譬へん方なく心動かさるゝ景色は、之を他に求めて己おのれは有りとも覺えぬ。(口)

5 さればこそ當のヴェニス人はアドリヤ海をヴェニス市の夫と見たのである。都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像ではないか。(口)

6 あはれ此の殿光頼卿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿(信頼卿)の座上に就く人もおはしまさざりつるに、しだいしたる事よ。門を入りたまふより聊かも隠したる體も見え給はず。あはれこの人を大將

として合戦せばいかばかり頼もしからん。

### 第二十章 文のとめ附係結

文のとめには種々の形式がある。

一 終止形でとめるもの

動詞・形容詞・助動詞の終止形で文をとめるのは、文の最も普通な形である。

終止形のとめ

猿も木より落つ。

山高く、水長し。

明日は晴天なるべし。

君は君たり、臣は臣たり。

終止形の語でとめるべき所を他の形の語でとめてはならぬ。左の

連體形の結法

如きとめ方は何れも誤である。  
 余は昨日某校の運動會を見ける。  
 この頃の寒さにつきても、遠征軍の辛苦思ひやらるゝ。  
 〓勉強は幸福の母。孝は百行の本。のごとく名詞でとめたやうに見えるものは、下に來るべき助動詞の終止形 なり などを省いたものである。

二 連體形で結ぶもの

ぞ 〓 なむ や か などの助詞が文の上に添はつてゐるときは、下を動詞助動詞形容詞の連體形で結ぶ。

家 ぞ 〓 なむ 榮ゆる。  
 夜 ぞ 〓 なむ 明けぬる。

ぞ 〓 なむ や か の係詞

色 ぞ 〓 なむ 濃き。  
 花 や 〓 咲く。散りぬる。遅き。  
 誰 か 〓 知るべき。いふ。早き。  
 かやうに用ひたものを ぞ 〓 なむ や か の係詞といふ。  
 〓名を天下に揚げたりとぞ。終に善人となりたりとなむ。君の文にや。如何なる罪にか。のやうに、ぞ 〓 なむ や か などで言ひすてたやうに見える文は、下に來るべき連體形の語 聞く 言ふ あらむ などを省いたものである。

三 已然形で結ぶもの

已然形の結法

こそ の動詞が上に添はつてゐるときは、下を動詞・助動詞・形容詞の已然形で結ぶ。

家こそ榮ゆれ。

夜こそ明けぬれ。

色こそ濃けれ。

かやうに用ひた こそ を こそ の係詞といふ。

※「感ずべきことにこそ。」のやうに、こそ で言ひ捨てたやうに見える文は、下に來るべき已然形の語 あれ ありけれ 等を省いたものである。

※「心知りの友どちなむ別れ難く思ひて、しきりに訪ひ來。」われこそ見送りに行くべかりしを、つひにえ果さざりけり。」などのやうに、結となるべき用言を言ひ切らないで下に連接させることがある。かやうな場合には、係に對する結は自然に隠れてしまふ。

こそ の係詞

命令形のとめ

※係に對して結ぶべき語は意味の上から自らきまつてゐるから、他の處で誤り結んではならぬ。次の文などは、何れもその結び方を誤つてゐる。

この時こそと思ひたれ。

菊の花は今ぞ盛と告げ越しける。

四 命令形でとめるもの

文には又動詞・助動詞の命令形でとめたものがある。

風よ吹け。

早く來い。(口)

疾く學校に往きね。

下女に庭を掃かせよ。(口)

五 助詞又は感動詞でとめるもの

助詞又は感動詞のとめ

文には又助詞或は感動詞でとめたものがある。

一 疑問の助詞又は指定の助詞でとめるもの。

君は今日運動會を觀給へりや、否や。

進まうか、それとも退かうか。(口)

かくあるべしとは、かねてより思ひしことぞ。

※この「ぞ」を係の「ぞ」で下に連體形の語を省いたものと混同してはならぬ。

二 感動詞でとめるもの。

あはれたのもしき人々や。

あゝ、悲しいかな。

よくいらしやいましたね。(口)

練習

次の文の係結の誤を正せ。

- 1 花は残りなく散るぞめでたし。
- 2 貧家に生れたるこそ幸福なりと古人もいひたれ。
- 3 ワシントンの父は誰か此の樹を斫りきと彼に問ひし。
- 4 地震のときは、火事なむ最もおそろしけれ。
- 5 維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなれ。われこそ躬を以て人臣の標準は示さん。

次の文のとめ並にぞ、なむ、や、かの係結、及びこそその係結を説明せよ。

- 1 精神一到せば、何事か成らざらん。
- 2 柿本人麿なむ歌の聖なりける。
- 3 彼は學識こそあれ、徳操のほどはいかにかあらん。
- 4 志ある者の事を成し遂げぬは稀なりとなむ。

- 5 今朝訪ひ來べき約束なるに、今に來ぬは何故ぞや。
- 6 まことに行末たのもしき御事にこそ、いとせめて覺えしか。
- 7 かへらじとかねて思へば、梓弓無き數にいる名をぞとむる。
- 8 兵の、こゝにこそ。といはんずる一言をなむ待たせ給ひける。
- 9 世の中は何か常なる、飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる。
- 10 春の夜のやみはあやなし梅の花、色こそ見えぬ、香やはかくるゝ。
- 11 花橋は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞいにしへの事も立返り戀しう思ひ出でらるゝ。
- 12 歌よみは下手こそよけれ、あめつちの動き出してはたまるものかは。
- 13 合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひいかゞあるべき。
- 14 ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは。
- 15 國こそ多く、處こそ廣きに、當國へしも流されけるは、さるべき佐

- 殿の父の骸にも見參し給ふべき事にやと哀れにこそ候へ。
- 16 宮(大塔宮)いかでかゝる事あるべき。死なば一所にこそともかくもならめ。と仰せられければ、義光(村上)詞を荒らかにして、かゝるあさましき事や候。はやその御物具を脱がせ給ひ候へ。と申す。
- 17 あれ見給へ、箱王殿、空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わどのは弟、我は兄母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。
- 18 恐し〜、鬼も子を生むにや。鬼の子はいかなるものにか。とて物越しに人見たりしに、その親の鬼ならば、さこそはあらめ。
- 19 今の帝亦天照大神よりこの方の正統を受けまし〜ぬれば、この御定に争ひ奉るものやはあるべき。なか〜かくてしづま

るべき時の運とぞ覺ゆる。  
20 すめらぎは神にしませばすめらぎの勅としいはばかりこみま  
つれ。

中學日本文典上級用終

中學日本文典上級用

昭和八年九月二十六日印  
昭和八年九月二十九日發  
昭和九年二月三日  
昭和九年二月六日修正再版發行

定價金六十錢

文部省檢定

昭和九年二月十三日 中學國語教科書用科



編者

吉田彌平

東京市小石川區高田老松町五二番地

發行者

上原才一郎

東京市神田區神保町一丁目五番地

發行所

光風館書店

東京市神田區神保町一丁目五番地  
(電話 國神田三〇八七番  
振替口座東京三二七番)

印刷者

根本力三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地  
株式會社 秀英舍

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に  
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

